

# 史跡 齋宮跡

平成7年度現状変更緊急発掘調査報告

平成9年3月

明和町教育委員会

# 序

「幻の宮」と呼ばれていた斎宮が発見された昭和45年からはや27年が経過しました。

昭和54年3月に国史跡の指定をうけて以来、斎王の森や古里地区等の史跡公園の整備、斎宮歴史博物館の建設、歴史の道及び散策道などの整備も着々と進められてまいりました。

しかし、斎宮跡は約137haにおよぶ広大な史跡で、斎宮の全貌が明らかになるまでまだまだ長い年月がかかることもあり、斎宮跡の将来像がなかなかみえてこないのも事実であります。また、史跡内には約600世帯もの住民が生活を営んでいる特殊性もあることから平成8年3月、三重県教育委員会と明和町教育委員会により地域の生活環境整備も配慮して史跡整備に関する長期的な方針を示す「史跡斎宮跡整備基本構想」がまとめられました。今後はこの構想を軸にして史跡整備と地域住民の生活環境整備の調和を図りながら事業が進められるものと期待しております。

さて、このように斎宮跡の保護・保存・活用が進み、広く国民の文化遺産として評価される一方、個人住宅の新築・増改築など地域住民の生活に結びつく現状変更等許可申請書が平成7年度には39件提出されました。

この報告書は、その中で事前調査が必要であった3件についての結果をまとめたものであります。現状変更に伴う調査は小規模なものがほとんどであります。第110-2次調査は、史跡東端部の参宮街道付近で約500㎡程のまとまった調査となり、斎宮の遺構のほかに参宮街道の発展に関連する遺構も確認されました。これらの成果の積み重ねが斎宮跡の姿をより鮮明にするものと思っております。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元地権者のみなさま、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた斎宮歴史博物館調査研究課に対してここに厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

明和町教育委員会

教育長職務代理者 中山正美

# 例 言

1 本書は、明和町教育委員会が平成7年度に実施した、史跡斎宮跡の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

なお、第106-6次調査・第110-2次調査は国庫及び県費の補助金の交付を受けて実施したものであり、第110-1次調査は、原因者が費用を負担して実施したものである。

2 発掘調査は、明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館調査研究課および明和町教育委員会斎宮跡対策課が担当した。

3 遺構の実測にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。

4 遺構・遺物の時期区分は「斎宮跡の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。

5 遺構表示記号は次のとおりである。

S B : 建物    S A : 柵列・塀    S E : 井戸    S K : 土坑    S D : 溝    S F : 道路  
S X : その他

6 特に標示がない限り、遺物の実測図は実物の4分の1、遺物写真は3分の1である。

7 今回掲載した発掘調査に関わる出土遺物および図面・写真類は斎宮歴史博物館が保管している。

8 現地の発掘調査および本書の作成には、斎宮歴史博物館調査研究課の吉水康夫、大川勝宏（平成7年度）、駒田利治、野原宏司、上村安生、赤岩操（平成8年度）と明和町教育委員会斎宮跡対策課の森田幸伸（平成7年度）、中野敦夫（平成8年度）があたった。

また、遺物・資料整理には島村紀久子、角谷和代、奥田康子、鈴木美智子、田所美里、田中里佳の協力を得た。

## 目 次

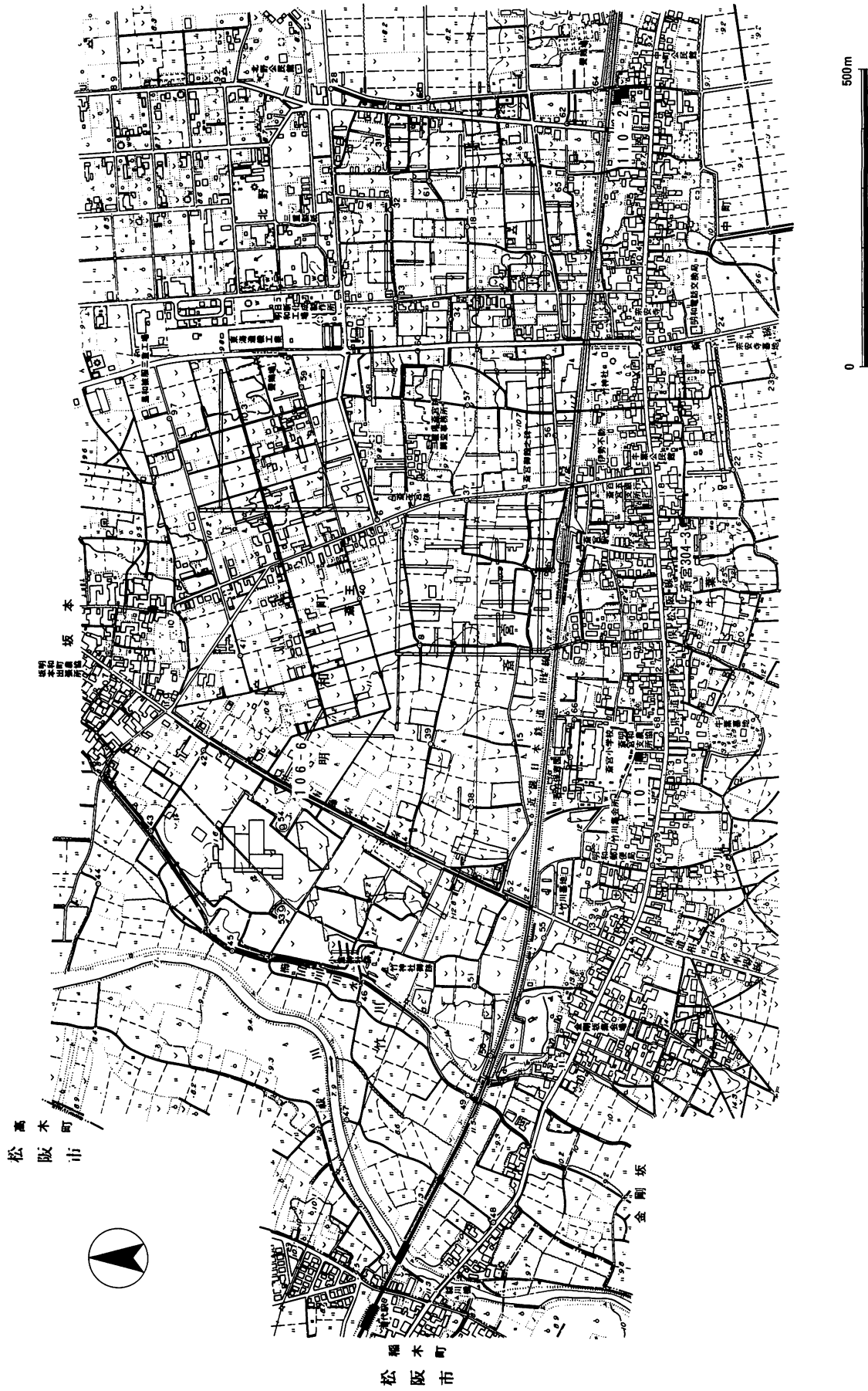
1	前 言 .....	1
2	第106-6次調査 (6ACC-B) .....	2
3	第110-1次調査 (6ACM-J) .....	4
4	第110-2次調査 (6AGR-O) .....	8
付編 1	斎宮304-3番地立会調査 (6ADT-P) .....	20
付編 2	史跡現状変更等許可申請.....	22

## 表・挿図目次

〔表〕 1	史跡現状変更等許可申請の推移 .....	1
2	平成7年度現状変更等許可申請一覧表 .....	23
3	掘立柱建物一覧表 .....	25
4	出土遺物観察表 .....	25
〔図〕 1	平成7年度発掘調査位置図 (1:10,000)	
2	第106-6次調査 調査区位置図 (1:5,000) .....	2
3	〃 遺構実測図・調査区断面図 (1:200) .....	3
4	第110-1次調査 調査区位置図 (1:5,000) .....	4
5	〃 遺構実測図・調査区断面図 (1:200 , 1:100) .....	5
6	〃 出土遺物実測図 (1:4) .....	6
7	〃 調査区周辺の周溝遺構 (1:2,000) .....	7
8	第110-2次調査 調査区位置図 (1:5,000) .....	8
9	〃 遺構実測図・調査区断面図 (1:200) .....	9
10	〃 S D 7501断面図 (1:40) .....	10
11	〃 出土遺物実測図 1 (1:4) .....	14
12	〃 出土遺物実測図 2 (1:4) .....	15
13	〃 出土遺物実測図 3 (1:4) .....	16
14	〃 出土遺物実測図 4 (1:4) .....	17
15	〃 調査区周辺の方格地割と参宮街道 (1:4,000) .....	19
16	斎宮304-3番地 立会調査地位置図 (1:5,000) .....	20
17	〃 立会調査地遺構略実測図 (1:200) .....	21

## 写 真 図 版

P L 1	第106-6次調査	上：A地区全景 (南西から)	下：B地区全景 (南西から)
P L 2	第106-6次調査	上：S D 7364 (北西から)	下：S D 7366 (北西から)
P L 3	第110-1次調査	上：調査区全景 (東から)	下：S X 7496断面 (東から)
P L 4	第110-1次調査	上：S X 7497断面 (南から)	下：S X 7497断面 (西から)
P L 5	第110-2次調査	上：調査区北半全景 (東から)	下：調査区南半全景 (東から)
P L 6	第110-2次調査	上：調査区南建物群 (東から)	下：S B 7550 (東から)
P L 7	第110-2次調査	上：S D 7501 (東から)	下：調査区北土坑群 (東から)
P L 8	第110-2次調査	上：S E 7519 (北から)	下：S E 7559・7560 (西から)
P L 9	第110-1次調査・第110-2次調査	出土遺物	
P L 10	第110-2次調査	出土遺物	



第1図 平成7年度発掘調査位置図 (1:10,000)

# 1 前 言

斎宮跡では、史跡指定以来年間で平均50件程度の史跡現状変更の許可申請が出されているが、平成7年度においても39件の申請が提出された。その内容も史跡内住民による個人住宅や農業用倉庫の増改築とともに、県道・町道や側溝の整備、信号機の設置、水道管の埋設といった生活環境整備を含む公共事業に関わるものも目立った。今年度に文化庁より事前調査の指示を受けたものは7件あるが、その内2件については面的な発掘調査を実施し、明和町の申請による町道側溝の新設の3件については調査の結果、掘削範囲内では後世の攪乱により遺構面は残っていない事が判明した。残り2件については現在までの段階で未調査である。

本書では、本調査にいたった3件について報告する。第106-6次調査は、昨年度から継続されたものだが、個人住宅新築に先立って申請地内に2本のトレンチを入れたものである。調査地である斎宮字塚山周辺では塚山古墳群が分布していることが知られているが、今回の調査では古墳の周溝の可能性のある溝が2条検出されている。

第110-1次調査は東裏地区と牛葉地区の字界付近での調査で、斎宮土地改良区事務所の建て替えによるものである。ここでも古墳の可能性のある7世紀の方形周溝が2基検出されており、史跡西部一帯に分布のみられる円形・方形周溝遺構との関連上、近鉄線以南の貴重な資料となった。

第110-2次調査は、史跡東端部での旧水田地の盛土によるもので、約500㎡と近鉄線以南では数少ないまとまった面積の調査となった。平安時代前半の方格地割に関連する遺構や中世～近世の参宮街道の発展に関連する遺構が多数見つかり、斎宮のみならず、この地域の歴史を考える上でも貴重な調査例となった。

今年度の調査では、特に近鉄線以南の史跡保存管理計画の第三種保存地区内において、貴重な調査データを得たといえよう。

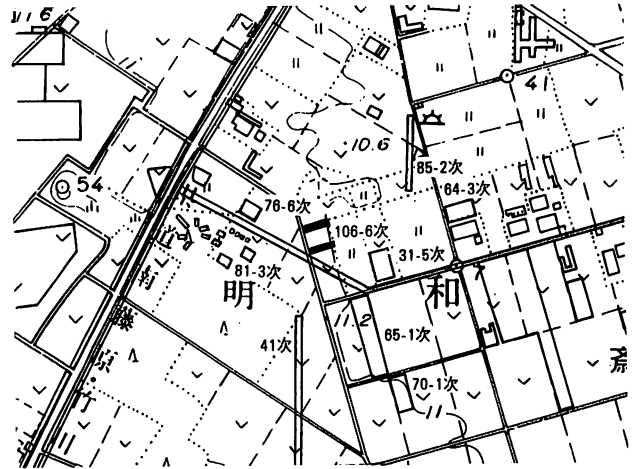
(大川勝宏)

年 度	現 状 変 更 申 請 数	発 掘 調 査 件 数	調 査 面 積 (㎡)	補 助 金 事 業 調 査 件 数	補 助 金 事 業 調 査 面 積 (㎡)
S. 54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
H. 元	57	16	7,091	9	1,061
2	58	8	1,397	5	914
3	46	3	1,550	1	1,190
4	41	6	895	5	825
5	48	8	1,670	6	1,090
6	35	6	1,360	4	1,032
7	39	2	587	1	480
合 計	798	174	47,685	126	17,977

第1表 史跡現状変更等許可申請の推移

## 2 第106-6次調査（6ACC-B）

調査場所 多気郡明和町大字斎宮字塚山3340-4  
 原因 個人住宅の新築  
 調査期間 平成7年1月23日～平成7年11月17日  
 調査面積 128m<sup>2</sup>  
 調査概要



第2図 第106-6次調査 調査区位置図（1：5,000）

①はじめに  
 周辺の状況 第106-6次調査は、史跡北辺部を東西に通る町道塚山線（歴史の道）沿いの北側に位置する。近年この周辺では住宅の新築に伴い小規模ながら緊急発掘調査が行われているが、計画調査はほとんど行われておらず、史跡の実態が解明されていない地域でもある。

当該地区では、分布調査で24基確認された塚山古墳群が点在し、史跡南西部の古里地区から史跡北辺部を通る鎌倉時代の大溝が検出されている。また、本調査区の東側では、昭和55年度に個人住宅の新築に伴う事前調査として第31-5次調査が実施され、奈良時代の竪穴住居1棟や、掘立柱建物3棟、溝2条等を検出している。

調査の方法 調査地の現況は畑地であり、5m×16mと3m×16mの調査区を2箇所設定した。調査面積は128m<sup>2</sup>となった。

### ②遺構

調査区内では包含層はほとんど削平されており、遺構検出面までの深さは0.2m～0.3mであった。調査の結果、木の根によるとみられる攪乱が多く見られたが、主な遺構として溝5条、土坑1基を検出した。

S D 7364 南北方向の溝で、幅約1.5m、深さ約0.7m、断面は逆台形で、南側では大きく東へカーブしてS D 7369に続くものと考えられる。遺物には土師器皿・鍋や陶磁器片、石製五輪塔（火輪）の一部などが出土しており、17世紀代のものとみられる。

S K 7365 3.6m×1.8mの不整楕円形で、深さ0.2m前後である。遺物は土師器片や陶器片が少量みられたのみである。近世以降のものであろう。

S D 7366 幅約1.5m、深さ約0.3m前後の浅い溝だが、平面形が円状であることから古墳の周溝と考えられる。推定直径は約6mほどになる。埋土最上部から山茶碗片が出土している。

S D 7367 東西方向に延びる溝で、検出長約9m、幅約0.7m、深さ約0.2m、溝底は西から東へやや傾斜している。土師器小皿やロクロ土師器碗、須恵器甕片が出土している。平安時代後期のものとみられる。

S D 7368 平面形でやや弧を描くことから、これも直径約10m程度の円墳の周溝の可能性が想定される。溝幅約0.8m、深さ約0.15m前後と浅い。出土遺物はみられない。

S D 7369 調査区北東隅で検出し、全体はよく分からないが、深さ約0.2mで、幅は1.3m以上と推定される。土師器鍋片や須恵器甕片も出土しているが、17世紀以降のものとみられる。

### ③遺物

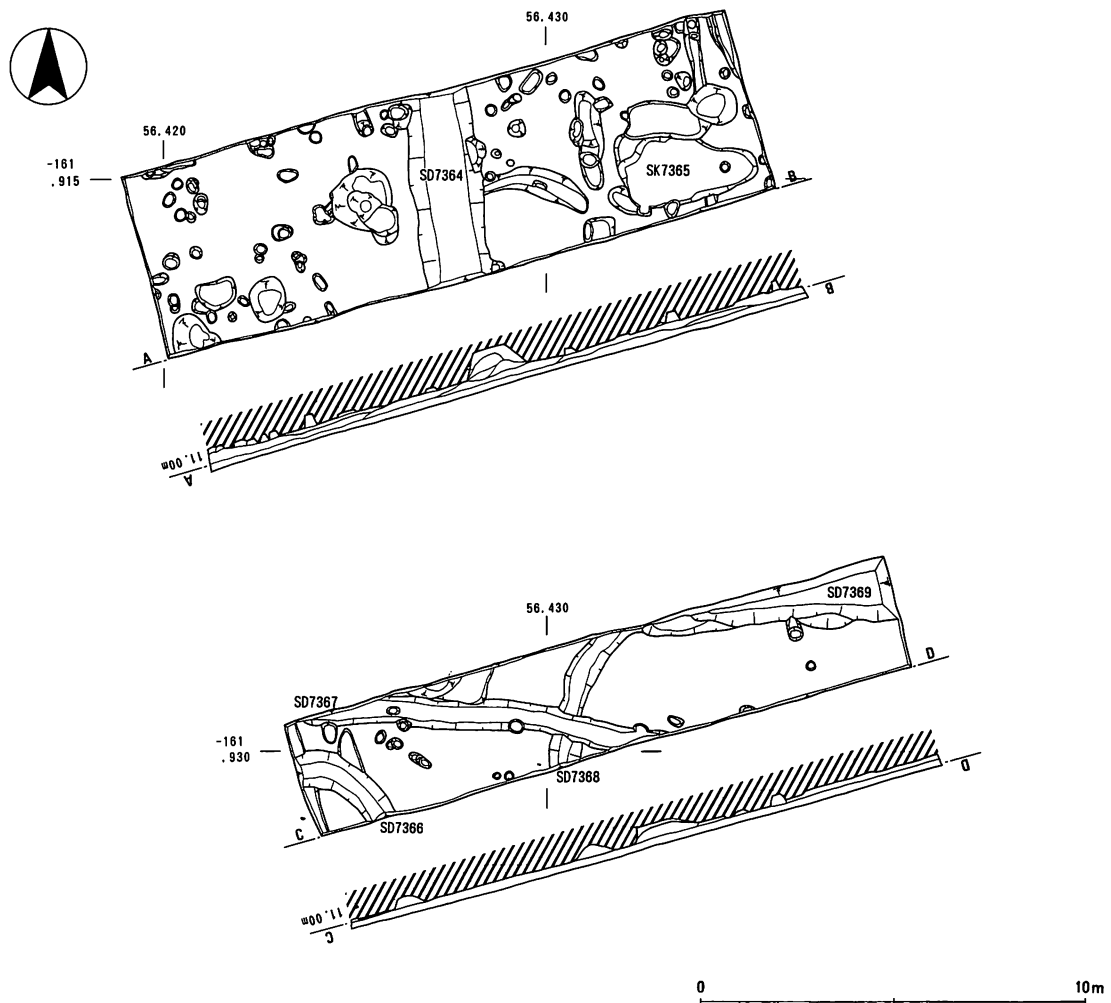
遺物は、表土および包含層からの出土はほとんどないが、S D 7364・7369の上層からは山茶碗や土師器鍋の小片や石製五輪塔の火輪の残欠が出土している。中世の遺物も含まれるが、遺構は、17世紀以降のものである。

古墳時代の遺物は散見されるのみで、S D 7366から土師器小片、S D 7367土師器片や須恵器甕片がみられたにすぎない。

### ④まとめ

今回の調査区内では、出土遺物も少なく、時期および遺構の性格を十分に把握できたとはいえないが、周辺地域の古墳の分布状況からS D 7366・7368を古墳の周溝と推定した。また、東西方向のS D 7367が第31-5次調査で検出した奈良時代の溝S D 2042・2043とほぼ並行することから、何らかの関連性もうかがえる。

これまで実施されている周辺の調査結果からも宮域北部にあたるこの地区からは斎宮寮に直接関連する遺構は検出されていない状況であるが、今後は周辺地域の計画的発掘調査をもとに本調査区の遺構の性格を検討していく必要があると思われる。(野原宏司)



第3図 第106-6次調査 遺構実測図・調査区断面図(1:200)



### 3 第110-1次調査（6 ACM-J）

調査場所 多気郡明和町大字竹川277  
原因 土地改良区事務所の建替え  
調査期間 平成7年9月21日～平成7年10月13日  
調査面積 107m<sup>2</sup>  
調査概要

#### ①はじめに

調査の原因 第110-1次調査は、斎宮土地改良区事務所建物を撤去し、新たにプレハブ建物の事務所を設置するのに先立つ緊急発掘調査として実施した。

今回の調査区は申請地の北半分におよそ11m×9m、また浄水槽の設置が予定される箇所を一部東に拡張する形で設定した。

調査区の周辺

調査地は、史跡中央やや南よりに位置し、旧参宮街道（県道伊勢・小俣・松阪線）から北へ約40m入った地点である。周辺では北に隣接する斎宮小学校の改築に伴って数次の発掘調査が実施されており、奈良時代の竪穴住居、奈良～鎌倉時代の掘立柱建物、円形周溝遺構、中世墓、道路側溝の可能性もある併走する溝などの他、わけても平安時代後期の四脚門（S B 0700）とその東西両側に取りつく築地の痕跡とみられる併走する溝が発見されており注目される。今回の調査区は、東接する現行道路が字界（東裏と牛葉）となっており、斎宮存立期に遡る道路遺構の検出も期待された。

#### ②遺構

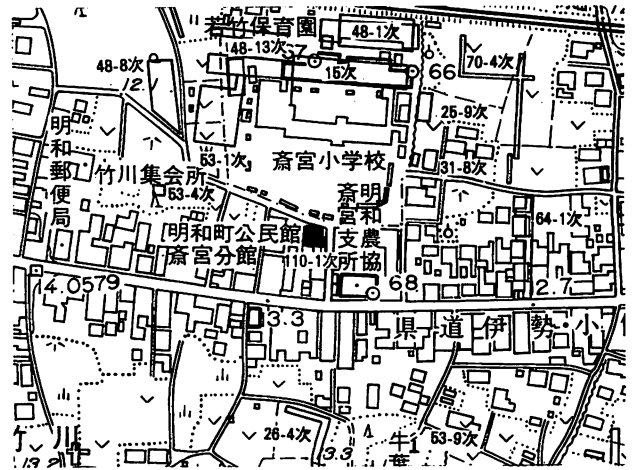
調査は重機で解体建物と基礎部分、さらに包含層上半まで除去し、以下人力で掘削を行った。最終的に現地表面から約0.8m～0.9mを掘削した段階で認められる、灰白色～明黄褐色のシルト質に富む粘質土を遺構検出面としたが、遺構は予想外に少なく、2基の方形周溝遺構と土坑を検出したのみである。

S X 7496

調査区の北西端で南東隅部分のみ検出された周溝遺構である。溝の幅約1.4m、深さは遺構検出面から約0.5mで、断面逆台形である。一部の検出に止まったため全体のプランはうかがい知ることができない。埋土は大部分が均質な黒色シルト質壤土（黒ボク土）で、下底部に地山崩壊土ブロックが混入する。遺物はこの埋土中程からほぼ完形の須恵器杯（1～4）の他、土師器甕（5）等がわずかに出土しているが、意図的な埋納は考えられない。

S X 7497

調査区東半で、南と西の二つのコーナー部分が検出された。各溝は直線的に伸び、平面は方形になるものとみられる。東と西の溝心々間で約10.2mとなる。溝は断面逆台形で、幅約0.8m～1.4m、溝底部の形状はおおむね平坦だが、深さは一定ではなく、検出面から約0.25m～0.45mとなり、特にコーナーの部分で浅くなる。遺構埋土はS X 7496同様、黒色シルトを主体とするが、下半部には地山崩壊土や砂質土の混入は多い。埋土中の遺物はS X 7496より少なく、西側溝の埋土中程から須恵器杯（6）が出土している



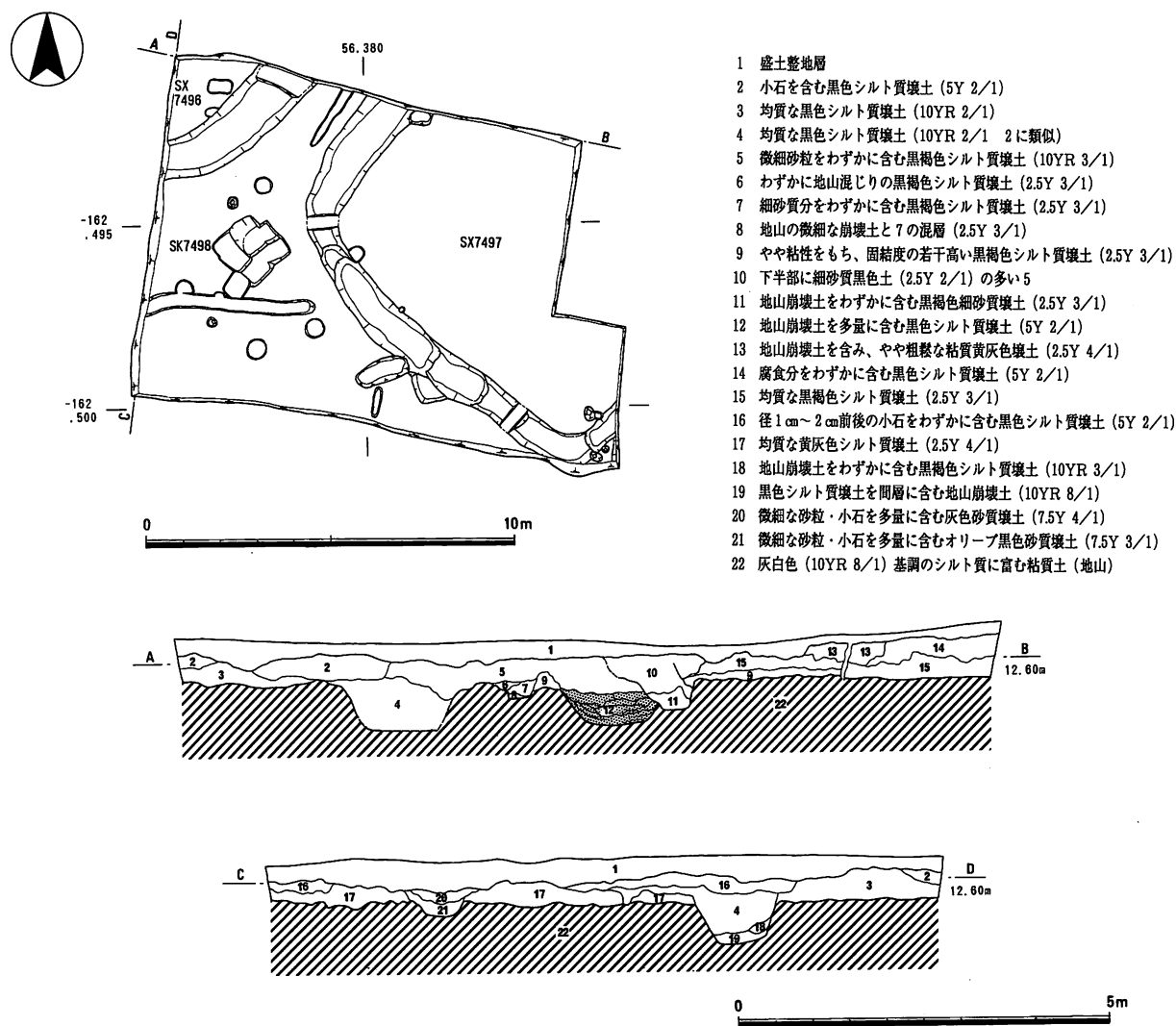
第4図 第110-1次調査 調査区位置図（1：5,000）

他、土師器甕の細片が出土しているにすぎない。

これら2基の周溝遺構は上面が流出、削平され、上部構造等明らかではない。調査区壁面土層の観察からは若干マウンド状の高まりのようなラインは認められるものの、盛土築成されたといえる痕跡はなく、自然堆積のような状況を示す。また、溝の肩の立ち上がりは鋭く、第72-4次調査で確認された塚山2号墳（方墳）などに見られる古墳周溝とも明らかに形状が異なる。溝底には両者とも地山崩壊土の小ブロックを含んだ埋土が5cm～8cm程、S X 7497ではさらにその上層に黒色土が若干の地山崩壊土を間層に挟んで均質に堆積する状況からみて、これらの周溝は掘削後の比較的短期間のうちに埋没していったものとみられる。しかしながら以上の状況をもってしても墳丘の痕跡である可能性もまた否定できるものではない。

S K 7498

調査区西部で検出された一辺約0.5mの方角を基調とする、包含層上部から掘り込まれ、大量の近世末～近代の土師器・陶磁器類や瓦類が廃棄された土坑群である。掘形から複数の土坑が重複していたものとみられるが、検出の段階では重複関係や遺物では明確に分離できなかった。



第5図 第110-1次調査 遺構実測図・調査区断面図 (1:200, 1:100)

### ③遺物

調査区全体で整理箱20箱分の遺物が出土したが、大半は土師器・陶磁器類である。

2基の周溝遺構からの出土遺物は少なく、両者あわせて整理箱1箱ほどである。

SX7496 S X7496からは土師器甕、須恵器杯が出土している。土師器甕(5)は、胴部外面に縦方向の、内面は体部から口縁部まで横方向の粗いハケを施すが、口頸部に屈曲部と弱い肩を持ち、口縁端部をやや内側に引き上げる。

須恵器杯は2タイプある。(3・4)は、底部内面が強くへこみ、外面はヘラギリした後、乾燥時にできる底部のつぶれを最終的にカキ目調整している。最大径11cm強、器高3cm前後で、焼けぶくれが多数みられ、直径1mmほどの溶融した黒色粒が混在する。これらはいずれも暗灰色から黄灰色を呈する。(1・2)は、器高3.0cm~3.5cm前後、口径10cm前後、最大径12cm弱で、外面に降下灰など窯内落下物の付着や焼成時にできた気孔が多数みられる。

SX7497 須恵器杯(6)はS X7496の(3・4)と同系のものだが、体部は若干丸みを帯びる。土師器は甕があるが、細片のため図示できないが、短い口縁部が体部から屈曲をもって端部をすぼめながらわずかに上へ引き上げて成形されている。

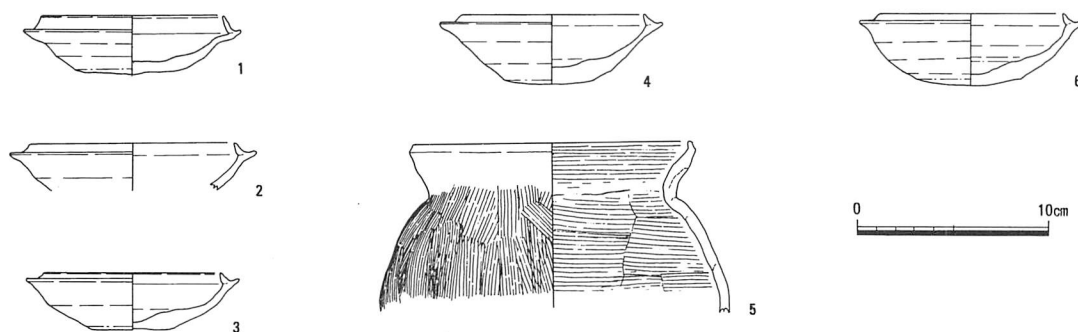
SK7498 遺構上面からのものも含めて出土した遺物は整理箱で18箱分になった。本調査区は旧参宮街道に沿った集落の裏手にあたり、ここから廃棄されたものであろう。遺物は土師器では焙烙・鍋・茶釜が、陶器類では湯呑み椀・天目椀・鉄釉鉢・灰釉瓶・播鉢・甕などが、磁器では湯呑み椀が出土している他、瓦片がみられる。

組成の上では土師器類が最も多く、瀬戸、常滑産の陶器類がこれに続き、磁器はほとんどみられない。参宮街道沿いの当該期の生活様式の一端を示すものと言えよう。

その他の遺物 特殊遺物とされるものは、弥生土器壺底部片がS X7497の埋土から出土した他、緑釉陶器1片、砥石1片、角釘3点が包含層から出土している。

### ④まとめ

周溝遺構の意義 2基の周溝遺構から出土した須恵器杯は底部が突出する特徴的な形状で、齋宮跡近辺では、多気町河田古墳群<sup>①</sup>をはじめとする後期古墳や多気町明気窯跡群・中尾古窯址<sup>③</sup>などの生産地で出土しており、7世紀前葉~中葉の在地系のものと推定される。今回の周溝遺構はその性格は依然不明ながら、溝の埋没状況と出土遺物から7世紀前半に前後する時期に掘削されたものとみられる。調査区周辺では、齋宮小学校改築の際の第15次調査



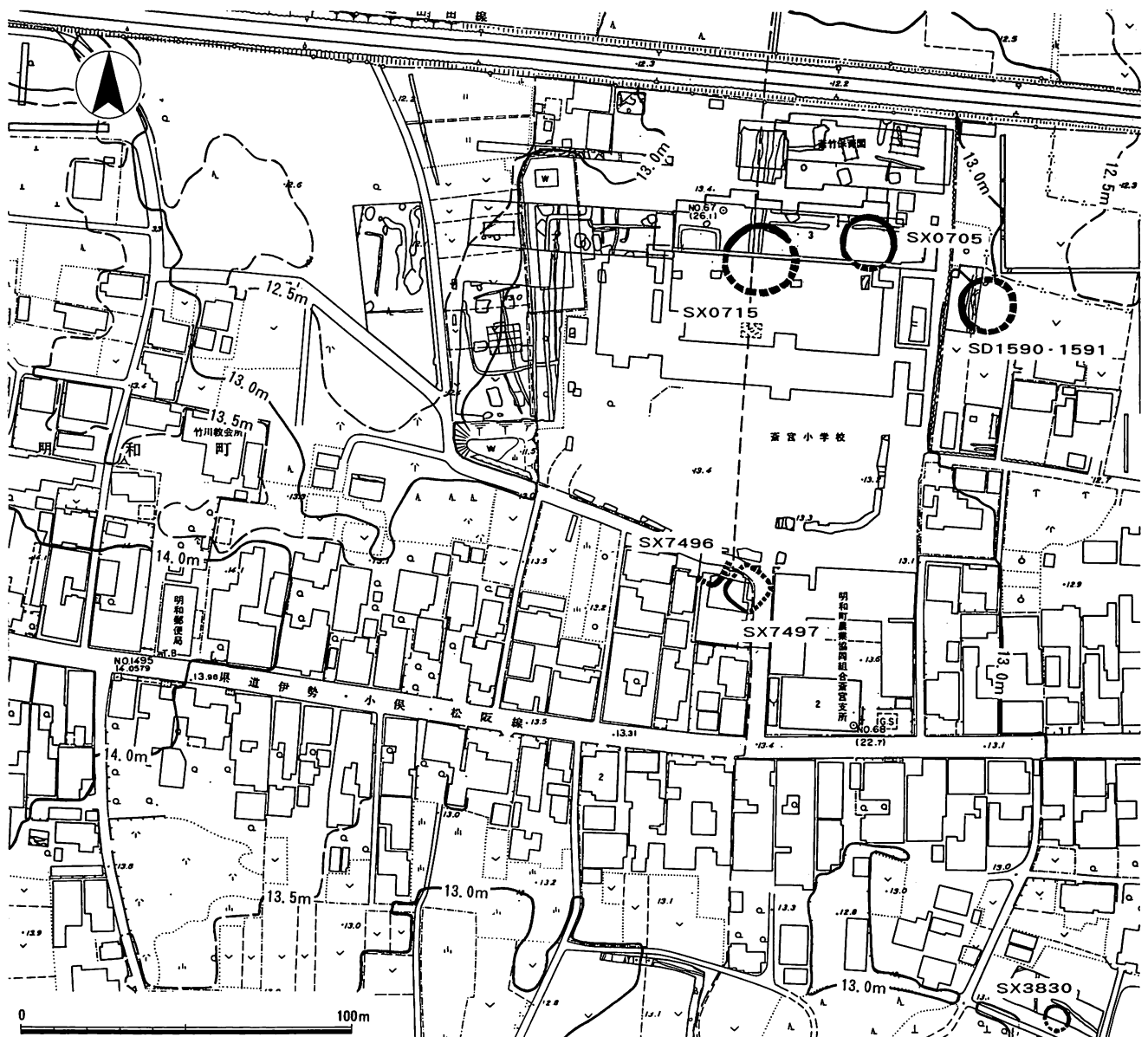
第6図 第110-1次調査 出土遺物実測図 S X7496: 1~5、S X7497: 6

で奈良時代前期とされる円形周溝が、また小学校東の第25-9次調査でも2基の円形周溝が発見されているが、近鉄線以南のものとしても、7世紀前半頃のものとしても方形周溝は初出である。これまで発見されている古墳と考えられる5～6世紀代のものと、奈良時代前半といわれるものとの間を埋める資料である。しかし、いずれにしても奈良～平安時代以前の段階には斎宮小学校一帯にはこうした周溝遺構が多数分布している事が予想される。近鉄線以南の住宅密集地ながら、斎宮初期の実相を解明する上でも、調査の蓄積が痛感される。(大川勝宏)

[註]① 例えば 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町教育委員会 1974 等

② 宇河雅之他『明気窯跡群・大日山古墳群・甘槽遺跡・巢護遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1995

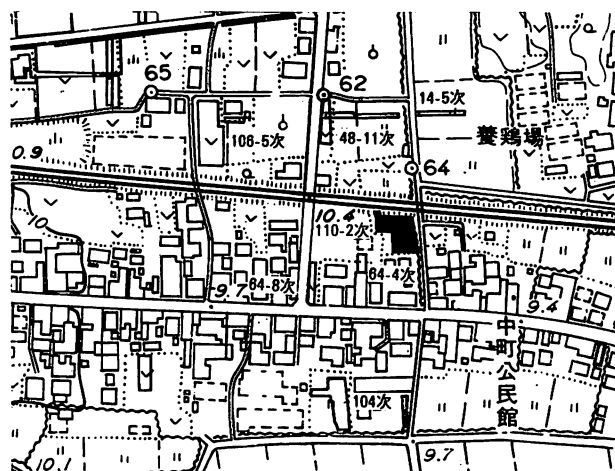
③ 下村登良男「付Ⅲ 中尾古窯址群発掘調査報告」「河田古墳群発掘調査報告Ⅲ」多気町教育委員会 1986



第7図 第110-1次調査 調査区周辺の周溝遺構 (1:2,000)

## 4 第110-2次調査（6AGR-O）

調査場所 多気郡明和町大字斎宮2345-3  
 原因 盛土  
 調査期間 平成7年10月11日～平成7年12月4日  
 調査面積 480m<sup>2</sup>  
 調査概要



第8図 第110-2次調査 調査区位置図（1：5,000）

①はじめに  
 調査の原因 第110-2次調査は、個人による水田地への盛土に先立つ事前調査として実施した。今回の調査地は史跡の東端部にあたり、現況は休耕田となっている。

調査区の設定 調査区は、申請地が逆L字形の不整形であるため、それに合わせた形で設定した。また、調査途中で遺構の確認のために南東隅と北西隅の一部を拡張した。

### ②遺構

調査地のほぼ全面に最大で厚さ0.25mの盛土がなされており、これを除いた後、旧耕作土下0.25m～0.4mで遺構検出面である明黄褐色の地山に達する。地形的には調査区内はほぼ平坦だが、極僅かに北へ向かって傾斜している。なお、調査区東半分の地山面では直径10cm前後の垂円礫群が露頭している。遺構は、住宅密集地に隣接した水田としては攪乱や削平は少なく、調査区全面で多数の遺構を検出した。

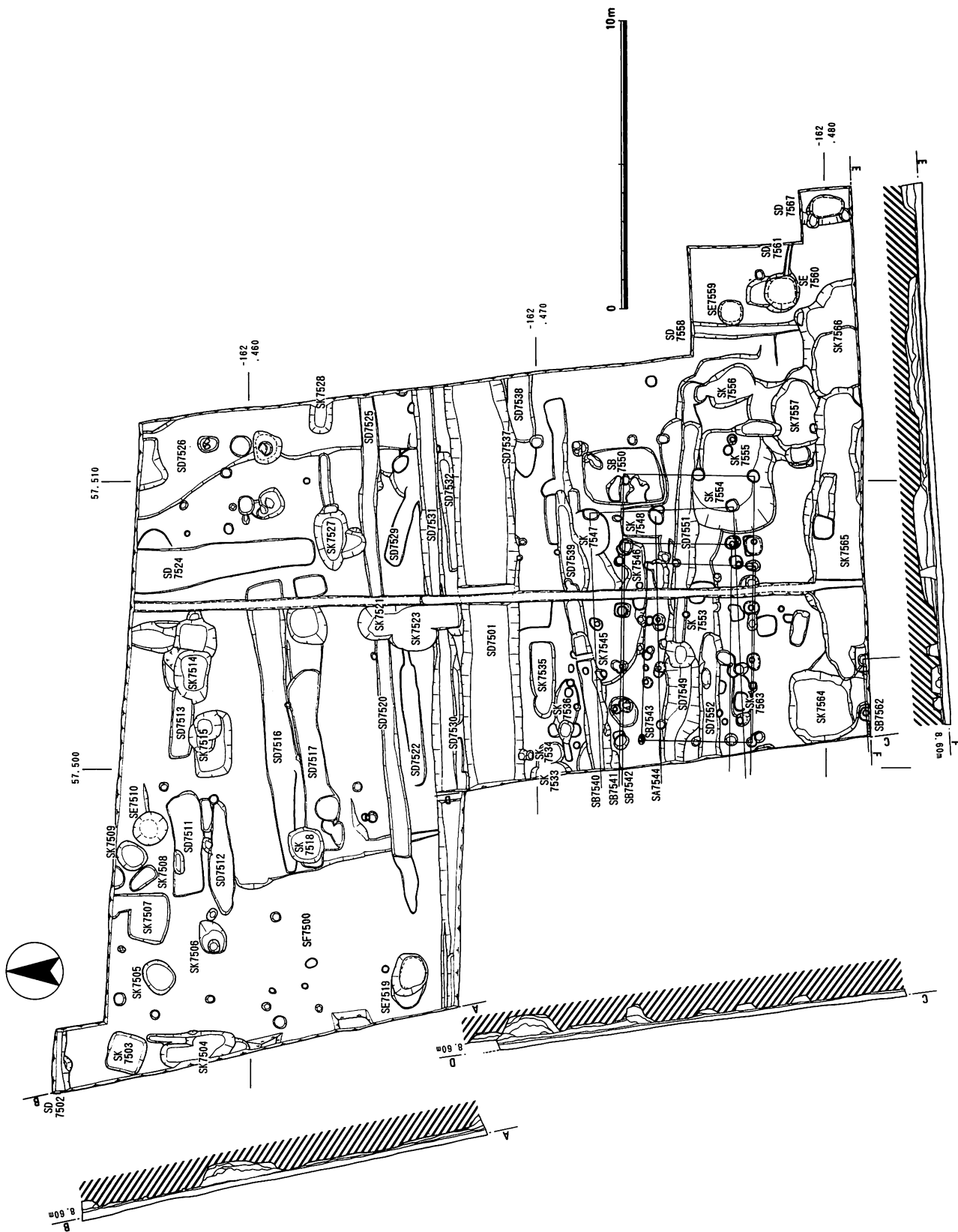
#### 1) 奈良時代後期～平安時代初期の遺構

溝2条と道路遺構、土坑1基がある。

SD7520・7525 いずれも幅約0.5m、深さ約0.2mの断面が弱い逆台形状の溝で、埋土の重複の関係上SD7525の方がやや古い。SD7520には平安時代初期頃の土師器杯（2）が、SD7525には奈良時代後期の椀（1）が、いずれも溝底に密着して伏せた状態で出土している。溝底のレベルは先述の垂円礫が露頭しているために凹凸はあるが、全体ではほぼ一定している。溝の方向からみて、方格地割を構成する道路の南側溝であると考えられる。

SF7500 このSD7520・7525を南側溝とするとみられる道路遺構SF7500は、北側側溝が検出されていないため道路幅は分からないが、調査区外に北側側溝を想定するならば、道路幅は13mを越えるものとなる。また道路面上には、第103次調査で検出した方格地割の東西道路SF6990のような整地層は見いだせなかった。

SK7506 調査区北西のSF7500上で検出された径約1.0m、深さ約0.3mの略円形の土坑である。土師器杯・皿・甕、須恵器把手付盤などの破片が出土している。道路の中央部という出土状況からみて、特殊な性格も考え得る。平安時代初期から前I期の前葉に位置づけら



第9図 第110-2次調査 遺構実測図・調査区断面図 (1:200)

れようか。

## 2) 平安時代前期の遺構

SD7501

調査区の中央を東西に走る断面逆台形の溝である。検出面の幅約2.0m、底部幅約1.3m、深さ約0.6m～0.7mで、調査区内での溝底の標高は7.6m前後で高低差はほとんどない。埋土は3層に分層できたが、いずれからも平安時代前Ⅱ期を最新とする土器類が出土している。最終的な埋没は、平安時代前Ⅱ期の終わりから中期にかけてとみられる。SD7501は、方向と規模からみて、前代からの道路遺構SF7500の南側溝であり、SD7520・7525を大規模に改作したものとみられる。これに対応する北側溝も今回の調査区内では見つかっていないが、これも調査区外に想定するならば、溝の心々間で14m以上の幅が推定され、これまでに斎宮跡の方格地割で見つかっている道路では最大規模のものとなる。

SB7562

調査区の南西隅の掘立柱建物で、柱穴を2個検出した。柱掘形は一辺約0.4mの隅丸方形で、径20cmの柱痕跡が見られる。柱掘形から土師器杯・甕の小片が出土しており、平安時代前Ⅱ期頃のものと思われる。なお道路側溝とみられるSD7501の南肩からは約12mの間隔を開けている。

## 3) 平安時代後期～末期の遺構

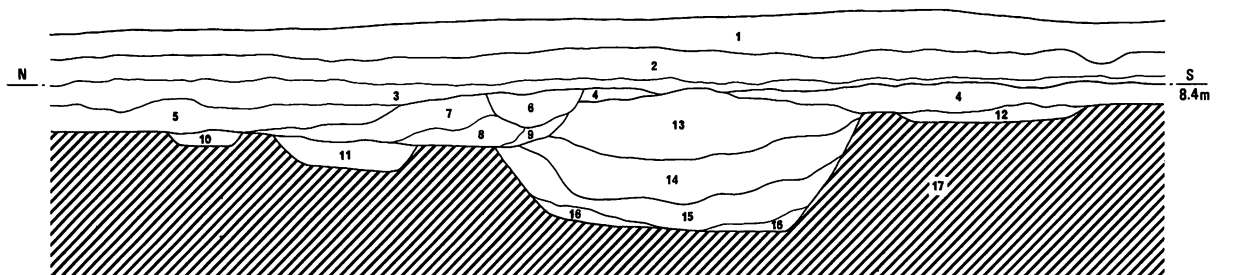
井戸1基、土坑2基、溝3条がある。

SE7519

調査区の北西で検出した素掘りの井戸で、区画道路SF7500の上面になる。検出面で径1.4m×1.2mの略楕円形である。検出面から深さ3.5mほど調査したが、底部には達せず、安全面から調査を中断した。しかし、遺構検出面から1mまでの上層で平安時代末期～鎌倉時代前半の、2m～3mの下層で平安時代後Ⅱ期の遺物が出土している。上層では土師器皿・鍋、ロクロ土師器小皿、陶器甕、渥美窯Ⅱ新段階の山茶椀<sup>①</sup>が、下層で土師器杯類や灰釉陶器小椀、ミニチュア土器(74)などが含まれる。

SD7531・7537

SD7531はSD7501が平安時代前Ⅱ期から中期にかけて埋没した後に掘削された溝で、



- |   |   |
|---|---|
| 1 工事残土の堆積層                              | 10 やや地山粘質土を含む黒褐色壤土 (10YR 3/1)                     |
| 2 微細な砂粒含むオリブ黒色粘質壤土 (5Y 3/1 水田耕土)        | 11 径2cm～3cmの小礫をわずかに含み、やや粘質をもった黒褐色壤土 (10YR 3/2)    |
| 3 鉄分の沈着する褐色堆積土 (10YR 4/6 水田床土)          | 12 地山粘質土粒をわずかに含む黒褐色壤土 (10YR 2/2)                  |
| 4 径1cm弱の小石含む黒褐色壤土 (10YR 3/2)            | 13 均質で締まりのよい、黒ボク質の黒色シルト質壤土 (10YR 2/1 SD7501埋土上層)  |
| 5 地山粘質土粒をわずかに含む黒褐色壤土 (10YR 2/2)         | 14 径2cm～3cmの小礫を20%含む黒褐色砂質壤土 (10YR 3/2 SD7501埋土中層) |
| 6 径3cm程度の小石をわずかに含み、黒褐色砂質壤土 (7.5YR 3/2)  | 15 砂質を多量に含む黒褐色砂壤土 (10YR 3/2 SD7501埋土下層)           |
| 7 径10cm弱の亜円礫を含む黒褐色砂質壤土 (10YR 3/2)       | 16 地山崩壊土と15の混層                                    |
| 8 径2cm～3cmの小礫をわずかに含む灰黄褐色砂質壤土 (10YR 4/2) | 17 部分的に10cm～20cmの亜円礫を含む明黄褐色の洪積層 (10YR 6/8 地山)     |
| 9 やや粘性の強い黒褐色壤土 (10YR 3/2)               |   |

第10図 第110-2次調査 SD7501断面図 (調査区東壁 1:40)

検出幅0.8m、遺構面からの深さは0.2m～0.3mの断面逆台形の溝である。底面高は標高約7.9mでほぼ一定している。土師器皿・台付椀や須恵器壺、山茶椀、陶器壺・鉢などが出土しており、平安時代末期から鎌倉時代にかけて埋没したことが分かり、区画道路側溝を踏襲する可能性のある溝である。

S D 7537はS D 7531の南約2 mで平行する幅0.3m、深さ0.2mの小規模な溝で、平安時代後期の土師器杯・甕の細片が出土している。

SD7512 調査区北部、区画道路S F 7500の上に掘削されている。長さ4.0m、幅0.9m、深さ0.2 mである。S F 7500の向きにほぼ揃う。遺物ではロクロ土師器台付杯、猿投窯編年で東山72号窯式に相当するとみられる灰釉陶器小椀片の他、須恵器猿面硯(79)が出土している。遺構は平安時代後I期頃に比定できようか。

SK7518・7527 区画道路S F 7500上に掘削された土坑である。S K 7518は直径約1.2mの略円形、深さ約0.3mで、ロクロ土師器片、土師器皿・甕、山茶椀片、須恵器片が出土している。S K 7527は長径約2.0m、短径約1.2mの砲弾形で、深さ約0.75mである。土師器鍋、須恵器片が出土しており、12世紀でも後葉のものとみられる。

SF7500の衰退 これらの土坑やS E 7519が掘削されていることにより、方格地割の成立により作られたS F 7500は、平安時代後期～末期にかけて廃絶していったものとみられる。

#### 4) 鎌倉時代の遺構

掘立柱建物1棟、柵列1条、土坑6基、溝4条が見つまっている。

SA7544 あるいは掘立柱建物の可能性もあるが、調査区内で4間分検出した。遺物は出土していないが、S B 7543等が重複しており、また前述したS D 7531に方向を揃えているため平安時代後期～末期以降、鎌倉時代頃のものともみられる。

SB7540 東西5間以上、南北2間の掘立柱建物で、重複関係からS A 7544やS K 7548に先行する。柱掘形は径0.5m前後の円形で柱痕跡は径20cm程度である。

SD7539・7549 前代までの区画道路南側溝の南側に位置する溝である。これまでの主な溝が方格地割の基軸であるE 4° Nに揃えていたのに対し、かなりアトランダムな状況になる。特にS D 7539はこれまでの溝に対して大きく北に振れる。幅0.7m、深さ0.5m、断面逆台形の溝である。S D 7549は最大幅1.2m、深さ0.25m、S D 7551は幅0.8m、深さ0.15mでこの2条は連続する。S D 7552は幅0.7m、深さ0.2mの浅い溝である。

SK7508・7509 調査北端に掘削された小土坑で、S K 7508は長径約1.1m、短径約0.6m、深さ約0.2mの楕円形で、S K 7509は径約1.0m、深さ約0.2mの略円形の土坑で、いずれからも土師器片が出土している。時期的には室町時代まで下がる可能性もある。

SK7533・7535 調査区西端の中央で検出した土坑で、S K 7533は検出で径約1.4m、深さ約0.1mの略円形とみられる土坑で、調査区外へ延びている。土師器片、山茶椀片が出土しており、S K 7535は長径約2.7m、短径約0.9m、深さ約0.2mの細長い土坑で、土師器鍋片、常滑産とみられる陶器壺片、山茶椀片が、また南接するS K 7536は長径約2.0m、短径約0.9m、深さ約0.2mの細長い土坑で、いずれもやや粘性のある黒色土の埋土で、S K 7536から渥美窯Ⅲ-2段階頃とみられる山茶椀<sup>①</sup>が出土していることから鎌倉時代後半以降のものであろう。

SK7548 後続するS K 7550に重複される、浅い方形の落ち込み状の土坑で、東西幅は不明だが、南北幅は検出長で約2 m、深さ約0.15mの規模である。土師器片、陶器壺片、山茶椀片



が出土している。

#### 5) 室町時代以降の遺構

今回の調査区内では掘立柱建物3棟、竪穴住居状遺構1棟、井戸3基、土坑22基、溝15条と最も多数の遺構が検出されている。遺構の分布も調査区内全体に均等に分布し、当該期にはこの地域が新たな段階に入ったことがうかがわれる。

SD7502・7567 調査区の北端と東端に位置する。いずれも肩部のみの検出で、全体の規模はうかがい知れず、また、遺物は全く出土していないが、褐色系の遺構埋土からこの時期のものと判断した。SD7502は東西溝の南肩部とみられ、掘り込みは深く、調査区内で深さ0.3mである。SD7567は南北溝の西肩部とみられ、近～現代の攪乱を受けている。これも調査区内では深さ0.4mある。SD7502は区画道路SF7500の北側溝に関連した位置にあり、また、SD7567は西肩ラインから東へ約2mのところを現在のエンマ川が流れており、確断はできないが、旧流路の一部である可能性がある。第14次調査の一連の史跡範囲確認調査や第96-1次調査でエンマ川に平行し、中世土器を包含する溝を検出している。SD7567もこうした遺構が近鉄線南側の住宅密集地まで続いていることを示すものと思われる。

SD7526・7532 SD7526は幅約2.5m、深さ0.2m、SD7532は幅約0.6m、深さ0.1mのいずれも浅い溝で、調査区東端で逆L字形に接続する。いずれからも山茶碗や土師器皿・鍋・茶釜が出土しており、16世紀前半頃のものともみられる。このうちSD7532を境に北と南で遺構の分布に差異が認められる。以下、北半と南半に分けて記述する。

SE7510 調査区北端で検出した素掘りの井戸で、直径約1.2mで、井戸屋形等は確認できなかった。遺構面下1.6mまでで作業の安全上調査を中断している。土師器鍋・茶釜片や陶器こね鉢と瀬戸大窯Ⅱ～Ⅲ期の鉄釉皿<sup>①</sup>が出土している。概ね16世紀前半のものであろう。

その他の調査区 かつてのSF7500上に当たり、鎌倉時代から遺構が散見するが、この時期から遺構の北半の遺構 密度が高くなる。溝では東西溝が6条、南北溝が1条、先述の逆L字の溝に囲まれるように掘削される。いずれも深さ0.1m～0.2m程度の浅い溝で、土師器皿・鍋片等出土しており、概ね16世紀代のものであろう。なお、SD7516はSD7517と同様な性格とみられる。

土坑は概ねSE7510を含め、調査区北西に並ぶように掘削されており、調査区中央部西半の空閑地を囲むようにもみえる。規模は2mを越えるようなものはなく、SK7504を除いて深さ0.1m～0.2m程度と浅い。いずれからも土師器類、わけても鍋類の破片が出土しており、15世紀代まで遡る可能性のあるSK7504・7505・7515と、16世紀代に入るとみられるSK7503・7507・7514がある。SK7521とSK7523は詳細な時期は不明だが、SK7521の方が古く、SK7523の底部には人頭大の礫群があった。

SK7528は他とはやや離れて掘削されている。土師器皿や施釉陶器片が出土した。

SB7541・7542 掘立柱建物は調査区南半に集中する。この2棟は東西4間以上、南北2間の掘立柱建物で、SB7541が先行する。柱掘形の規模は径約0.5m～0.6mの円形ないしは隅丸方形で、SB7542の柱穴から伊藤分類4-d形式の土師器鍋片<sup>②</sup>が出土しており、16世紀代のものとみられる。

SB7543 3間×2間のSB7543は、柱掘形が径約0.4m～0.5mの円形で、柱痕跡も径約20cm程度である。前代までの方格地割の道路側溝とは方向を違えており、柱掘形から平安時代

後期以降の土師器杯片が出土している。

SB7550

南北2.8m、東西2.0m、深さ約0.3mの浅い方形土坑で、西壁に接して馬蹄形に設えられた30cm大ほどの礫を含んだ焼粘土塊があり、炉として機能したものと考えられる。床面は固く締まるが、掘形内に柱痕跡は認められず、平面規模も小さいため、竪穴住居のような上部構造があるのかどうかは分からない。第50次調査のS B 3057・3067、第72次調査のS B 4810など、この時期の竪穴住居とされるものがみついているが、S B 4810は鍛冶場の遺構と推定されており、今回も炉を伴った構造から何らかの作業場的なものであったと考えられる。なお、S B 7550の埋土中からはスラグや砥石、フイゴ等は発見されていない。

SE7559

調査区南東隅で出土した直径約0.9mの素掘りの井戸で、遺構面下1.1mで調査を中断している。土師器皿・鍋や常滑産甕片、瀬戸産の黄釉小椀などが出土している。埋没は17世紀まで下ろうか。

SE7560

S E 7559の南2mに位置する。上記二つの井戸よりやや規模は大きく、直径約1.3mの素掘りの井戸である。遺構面から1.2mで掘削を中断している。土器類の出土量は多く、完掘していないにもかかわらず整理箱で3箱の土器が出土している。大半は土師器類で皿の他、大中小の鍋や茶釜があり、山茶碗も出土している。土師器類については一括性が高く、15世紀後葉のものとみられる。

その他の調査区 調査区南半では溝は少なく、大半は大型の土坑となる。

南半の遺構

S D 7538・7546はいずれも浅く小規模な溝である。16世紀後半から17世紀に入る可能性がある。S D 7558は幅0.5m、深さ0.1m、S D 7561は幅0.2m、深さ0.1m程度の細長い溝で、S E 7560やS K 7566に伴うものであろう。

土坑ではS K 7534・7563のように小規模で単独的なものと、S K 7554～7557・7564～7566のように大型で群をなすものがある。特に後者は調査区南端で大きな落ち込み状を呈し、比較的多量の土器片が出土し、土師器皿・鍋・羽釜の他、瀬戸・常滑産の陶器類がある。16世紀後半以降のものとみられる。

#### 6) 時期不明の遺構

全貌が把握できなかったため遺構番号は付さなかったが、調査区北東部でS D 7526に重複する根石を持つ柱穴が2個検出されている。直径1.0mほどの不整円形で深さ約0.5mで、心々間で約2.0mの間隔を開ける。S D 7526より新しく、16世紀後半以降のものとみられる。それに先行するとみられる根石を持たない柱穴も北に2個接している。周辺に対応する柱穴は見つけられなかったため一般の建物は考えにくく、エンマ川との位置関係から橋脚などの性格も考えるべきだろう。

#### ③遺物

今回の調査では、整理箱にして24箱の遺物が出土した。大半は土器・陶器類で、他には磁器類や、わずかに瓦片、砥石等の石製品などが出土している。土器類は奈良時代後期から近・現代のものまで出土しており、量的には室町時代のものが圧倒的に多い。ここでは遺構出土の比較的一括性のある資料と特殊な遺物を中心に概述したい。

##### 1) 奈良時代～平安時代の遺物

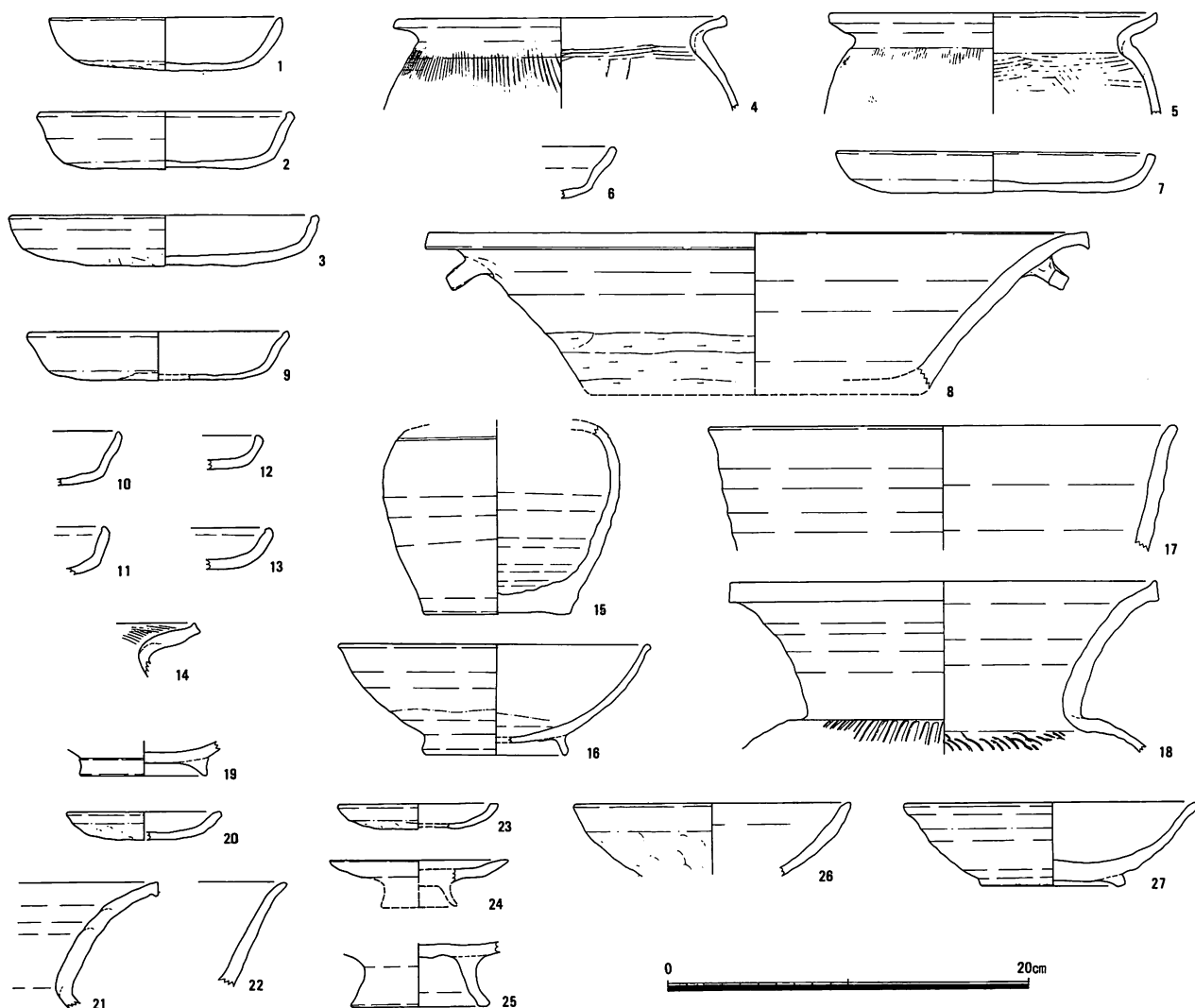
SD7520・7525

遺物は多くない。遺構の重複状況の上でもS D 7525が古い(1)のように奈良時代的な要素を持つ土師器杯が底部から出土している。器表面が荒れているため、詳細な

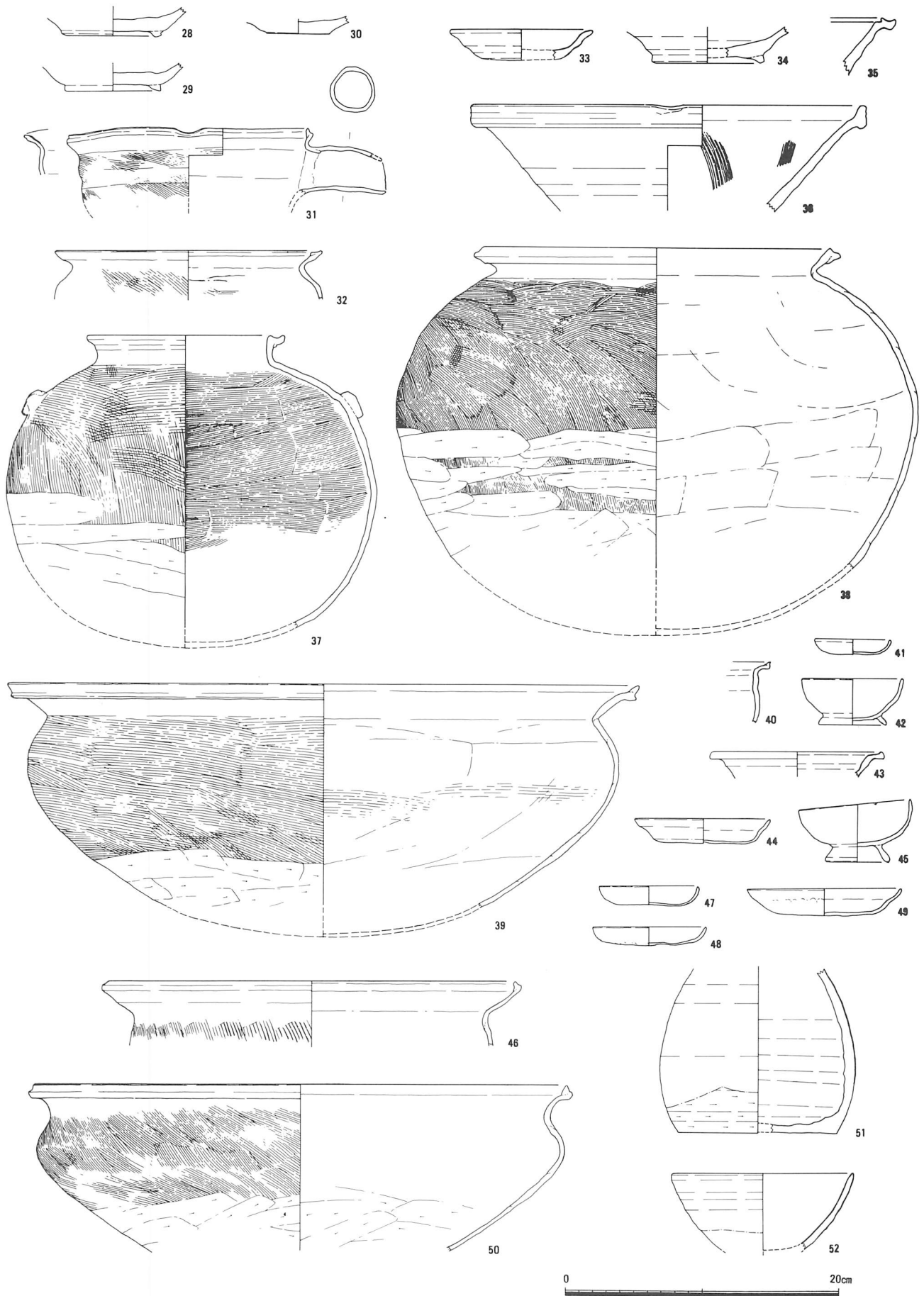
調整技法は不明だが、外面はナデ・オサエ調整とみられる。平安時代初期に位置づけられるS D7520の土器（2, 3）も溝底部からの出土で、底部外面はe手法によるものとみられる。

SK7506 S F 7500中央の土坑で、完形品はないものの、土師器杯（6）・皿（7）・甕（4・5）の他、須恵器把手付盤の大型破片（8）が出土している。これは焼成はあまく磨耗が著しい。土師器杯や皿はe手法による調整であり、平安時代初期から前I期の古相のものとみられる。

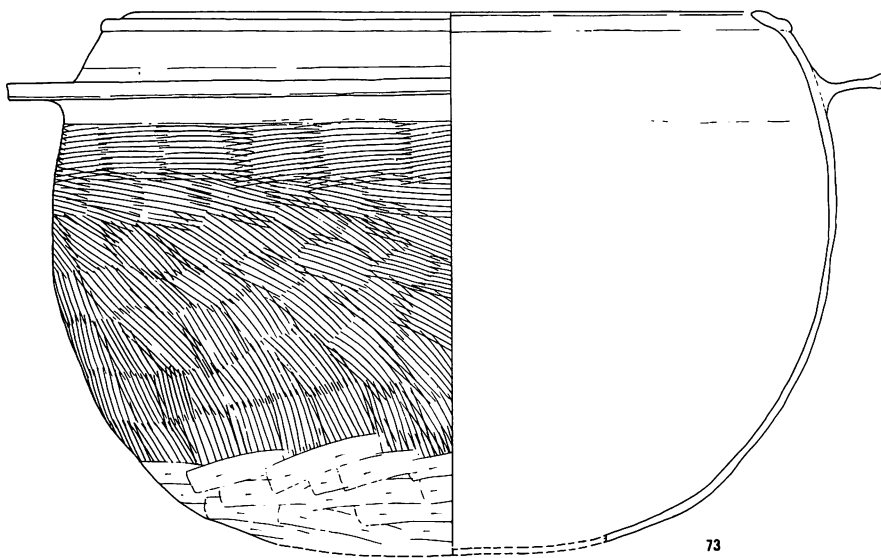
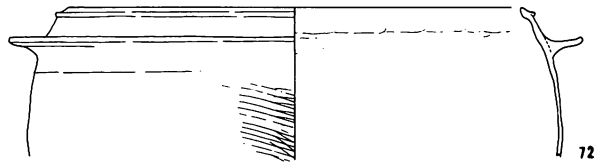
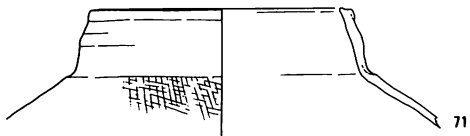
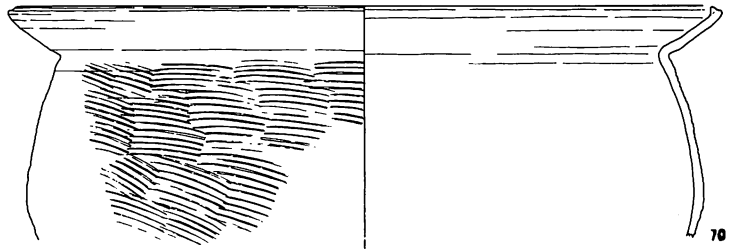
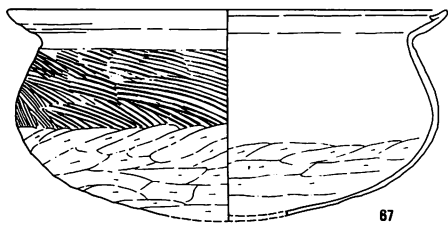
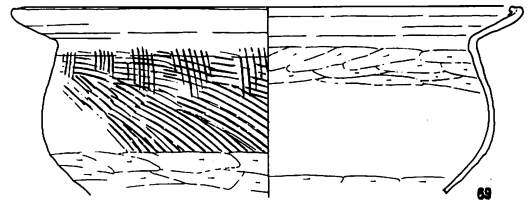
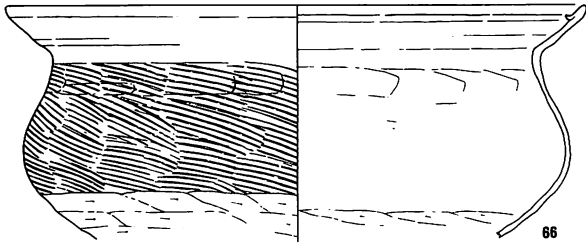
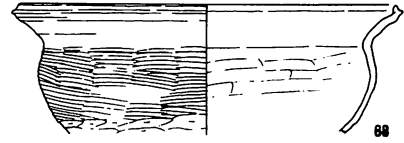
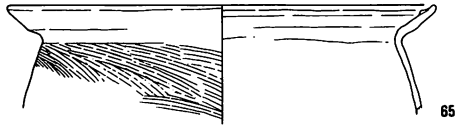
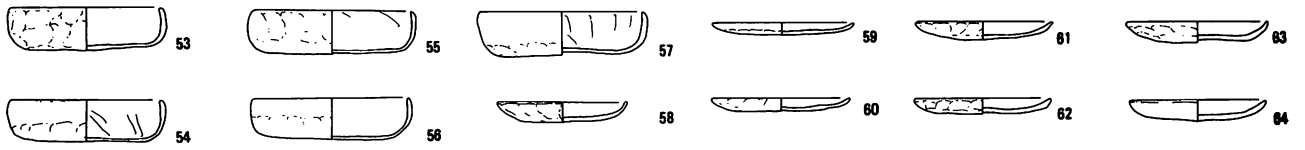
SD7501 遺構埋土は3層に分層できたが、明確な時期差は認められない。平安時代初期から前II期新段階の遺物が出土しているが、小片が多く、遺構の規模に対して出土遺物は少ない。なお、中層からの出土量が最も多い。（16）は猿投窯編年で黒笹90号窯式の新段階のものとみられ、高台内側にかすかに墨痕が残り、あるいは転用硯として使用された可能性がある。（17）は須恵器で、大型の鉢と考えられる。



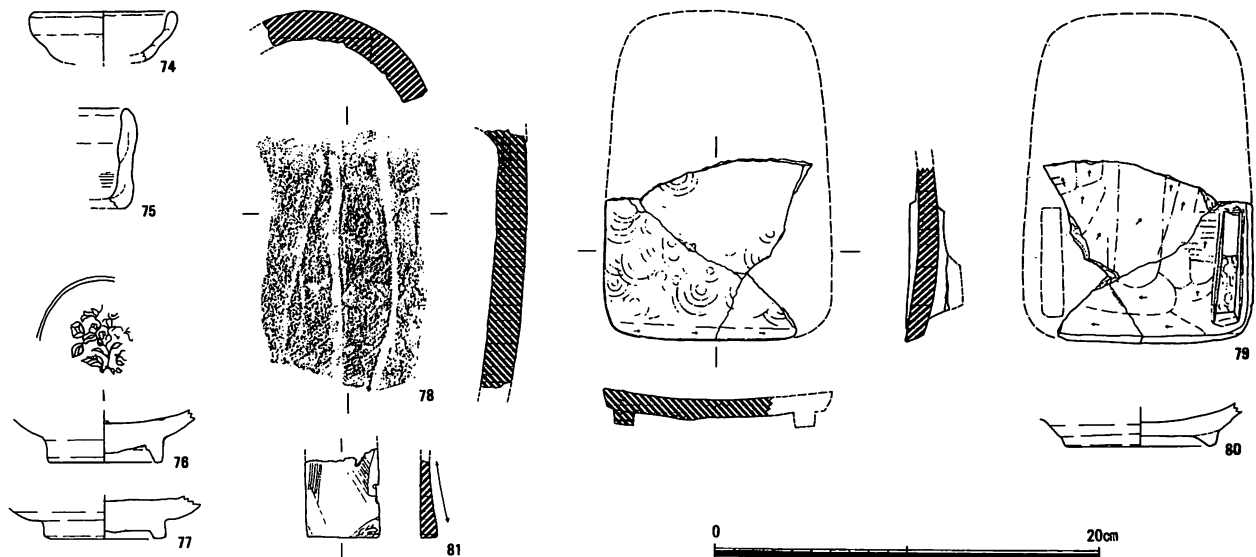
第11図 第110-2次調査 出土遺物実測図1 S D7525 : 1、S D7520 : 2・3、S K7506 : 4～8、S D7501 : 9～18  
S D7531 : 19～22、S K7519 : 23～27



第12図 第110-2次調査 出土遺物実測図2 S D 7549 : 28~30、S K 7505 : 31・32、S K 7553 : 33~35、  
 S K 7523 : 36、S D 7530 : 37、S E 7510 : 38、S K 7514 : 39、S B 7550 : 40~43、  
 S K 7528 : 44、S K 7563 : 45、S K 7555 : 46、S K 7565 : 47~51、包含層 : 52



第13図 第110-2次調査 出土遺物実測図3 S E 7560 : 53~73



第14図 第110-2次調査 出土遺物実測図4 ミニチュア土器：74、製塩土器：75、青磁：76・77、瓦：78  
硯類：79・80、石製品：81

## 2) 室町時代の遺物

今回の調査区の中では山茶碗や輸入陶磁器片など鎌倉時代に属するとみられる遺物は少なくないが、遺構に伴った良好な資料はみられなかった。

一転して室町時代に入ると土坑や井戸を中心に大量の遺物が出土している。

SE7560

その中でもS E 7560は、完掘はしなかったものの、遺構面から1 m前後を中心に多量の土師器類が出土しており、皿 (53~57)・小皿 (58~64)・鍋 (65~70)・羽釜 (72・73)・茶釜 (71) がみられる。整理箱で3箱の量になる。皿・小皿は完形品が多く、明るい色調の軽い焼き上がりで、外面には指頭圧痕や掌痕が残り、内面にはヘラ状工具で平滑に仕上げた痕跡を持つものもみられる。鍋類も大型破片が中心で、外面には多量の煤、内面には炭化物が付着し、使用の状況を示す。鍋類は伊藤編年の4 - b段階<sup>②</sup>を中心としており、15世紀後葉の良好な資料といえる。

大型土坑

調査区南端のS K 7565・7566などからも同様に、土師器鍋類を中心に多量の遺物が出土している (47~51)。鍋は伊藤編年の4 - c, d段階<sup>②</sup>にあたり、16世紀後半の資料である。土師器皿・小皿・小碗の他、陶器類では瀬戸産の灰釉折縁皿・端反り皿・三足盤や鉄釉瓶・天目茶碗など古瀬戸後期後半から大窯Ⅲ期<sup>③</sup>ぐらいまでの陶器類が散見される。

空白の14世紀

むしろ遺構でも同様の事がいえるが、14世紀代に属するとみられる資料が欠落することは留意すべき点かもしれない。

## 3) その他の遺物

特殊な性格の遺物として、須恵器猿面硯1、各種転用硯2、緑釉陶器4片、志摩式製塩土器2片、丸瓦1片、青磁15片、白磁1片、釘などの鉄製品6片がある。

猿面硯

S D 7512から出土した須恵器猿面硯 (79) は齋宮跡では4例目の出土である。全体の約5分の3を欠失しており、残長9.5cm、残幅11.0cmである。硯面はよく磨耗しており、縁辺部に青海波文を模した同心円文スタンプがみられる。背面は粗いケズリ調整で、脚部は貼付けた後、削り出して成形される。脚部と縁辺部の間隔が狭いことから、木枠などは付かないものとみられる。胎土には1 mm弱の白色粒が多量に混在し、質的にはこれ

までの出土品と比較しても粗雑である。

#### 丸瓦

丸瓦(78)は1点のみの出土で、胎土に径2.5cmの小石が入るなど全体に砂粒が多く、内面には布目圧痕と紐圧痕がみられる。平安時末期頃のものであろうか。

#### 中国陶磁

青磁・白磁が小片が多いが16片出土しており、調査面積に対する割合はやや高いといえる。龍泉窯系の青磁椀が多い。このうち(76)は見込みに細かい印花文を、外面に鎬蓮弁文を施す。

#### ④まとめ

方格地割の道路 エンマ川の旧河道は明確には検出されなかったものの、方格地割の北から3本目と考えられる東西道路の南側溝とみられる遺構を確認することができた。方格地割の道路側溝はこれまでも史跡の各所で見つかっているが、平安時代前半期に埋没したと想定される溝で、今回のS D 7501ほど大規模なものは例がない。この側溝に画される道路は西へ延びて鍛冶山地区の南を経て、現在の竹神社の前へ続き、以西は参宮街道に概ね合致する位置に作られていたとみられ、牛葉東ブロックや鍛冶山西ブロックなどの、平安時代前半の齋宮の中核部分と考えられているエリアに南面する道路と推定される。S D 7501は、この方格地割の幹線とも考えられる道路側溝がエンマ川への水口に近い部分のため、大規模なものとなっているともみられるし、または埋土が大きく3層に分層できるものの、底部の形状はフラットで、長期間の断続的な流水や、泥層が堆積するような滞水は考えられず、この部分の方格地割が平安時代の早い時期に完成していた事からみれば、数次の掘削・改修による最終的な姿と考えることもできる。なお、この東西道路は北側の側溝が確認されなかったため、間接的ながら、道路幅員は14mを超えるものと考えられ、この道路の一本北に位置する東西道路(S F 6990:幅員約13.3m)とともに方格地割を構成する道路の中でも規模が大きかったと推定される。

#### 遺構の変遷

今回の調査区内での遺構の変遷をみると、平安時代初期から前期にかけては方格地割の区画道路の規制が生きており、区画の主たる建物遺構は調査区のさらに南に分布するとみられ、調査区内の遺構密度は薄く、S F 7500を北限とする鍛冶山東区画の北東端の状況を示しているとみられよう。

#### 平安時代 中期の画期

今回の調査区内では明確に平安時代中期に属す遺構はみられない。以後、S F 7500は、その上にS E 7519が掘削されるなど、道路側溝は形を変えて存続していくにもかかわらず方格地割の道路としての機能は序々に失われていったものとみられる。しかし、これが決定的に変質するのは鎌倉時代後半以降とみられ、この道路を意識しなくなるとともに、旧参宮街道の縁辺の町屋的な土地利用になるものとみられる。その萌芽は遺構の変遷の他、鎌倉時代以降の中国陶磁の出土量の多さや、鍋類を中心とした土師器類の出土量の多さなど、遺物の面にも現れている。

#### 室町時代の 掘立柱建物

今回の調査では3棟の室町時代後葉の掘立柱建物も検出した。史跡内のこれまでの調査でも、当該期の建物の例は少なく、主に古里地区での検出であった。土師器鍋を多量に出土する土坑等もまた古里地区で多数見つかっているなど共通点もみられる。

今回検出した建物は、前代のものに比べて東で南に振れており、現在の参宮街道から約40m北に離れているとはいえ、これに規制されていることは間違いないだろう。土坑や井戸などの遺構も、14世紀の空白期をはさみ15世紀から再度現れはじめ、16世紀代からはかなりの増加がうかがわれる。比較的周辺では参宮街道南の第104次調査でも中世

末～近世初頭の区画溝が検出されている。中世末期～近世初頭には、参宮街道は整備されて南遷したといわれ、古里地区にあった旧竹川集落も現在の街道沿いに移動したといわれている<sup>⑤</sup>。今回の調査区の状況は、これに時期的にはよく符合しており、街道沿いの町屋の形成と変遷を考える上で貴重な資料とみることができるだろう。

しかしながら、方格地割にしても中世後期における参宮街道沿いの集落の変遷・発展にしても、依然近鉄線以南の調査例は乏しく、これらを証明する正確なデータはまだまだ欠ける部分が多いと言わざるを得ない。今回の調査は方格地割南半や史跡東端部の実態解明に資する大きな成果と課題を残したともいえよう。 (大川勝宏)

- [ 註 ] ① 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994  
 ② 伊藤裕偉「中勢南伊勢系土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会 1990  
 ③ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館 1991  
 ④ 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館 1986  
 ⑤ 平松令三他「松阪城下」「竹川村」『三重県の地名』平凡社 P512、P572 1983  
 中野イツ「12 斎宮から小俣」『伊勢街道』三重県教育委員会 1986 など

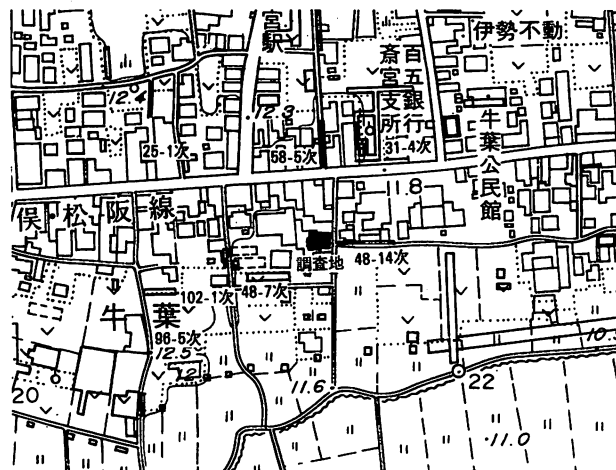


第15図 第110-2次調査 調査区周辺の方格地割と参宮街道 (1 : 4,000)



## 付篇 1 齋宮304-3番地立会調査 (6 ADT-P)

調査場所 多気郡明和町大字齋宮304-3  
 原因 個人住宅の建替え  
 調査期間 平成7年12月18日  
 調査面積 110m<sup>2</sup>  
 調査概要



第16図 齋宮304-3番地 立会調査地位置図 (1:5,000)

①はじめに  
 調査の経過 本現状変更は、個人住宅の建て替えである。当初の設計図より建物基礎の掘削は現地表面から約30cmで地山遺構面を破壊するおそれはないとみられたため、平成7年12月1日付け教文第144-29号により、齋宮歴史博物館職員の立会いの条件付き許可がおりた。

平成7年12月18日に建物基礎の工事に入ることになり、博物館・町教育委員会担当者が立会いに赴いたが、そこで申請後の地質調査により申請地の地盤は軟弱であり、新たに建物を建築する場合、地盤改良の必要性が判明した旨を知らされたため、現地協議を行うとともに、遺構がある場合これを残し、検出されたものは記録を取ることとなった。

調査の方法 調査対象は掘削される全域としたが、工事の工程から重機掘削を行いながらの記録であり、隣接するブロック塀を基準に検出した遺構の図化を行い、後からそれをもとに国土座標を取付けた。遺構は掘削箇所の北端で掘立柱建物の一部と溝が検出されたが、南側の大部分は地質調査どおり、かつての湿地が瓦礫を伴って埋め立てられた跡であり、遺構は全く残っていなかった。

### ②検出した遺構

地表面からおよそ0.3mほど掘削したところで遺構検出面である黄色粘質土になり、掘立柱建物1棟、溝2条、土坑1基と小穴を検出した。

S B 7570 調査対象地の北東端で柱穴を2個検出した。柱掘形は一辺約0.8mで遺構検出面から0.4m以上の深さがある。埋土は地山ブロックの混じるにぶい茶褐色で、底部付近では暗茶褐色の弱粘質土になる。柱痕跡は不明瞭で、柱間寸法は約2.2m前後とみられる。遺物は出土しなかったが、概ね平安時代前半のものであろう。

S D 7571・7572 S D 7571は調査地のほぼ中央の南北溝で幅約0.5m、深さ約0.3mの溝である。これから直角に延びるS D 7572は幅約0.25mで、暗褐色の埋土を持つ。平安時代前半のものと思われる土師器小片がわずかに出土した。

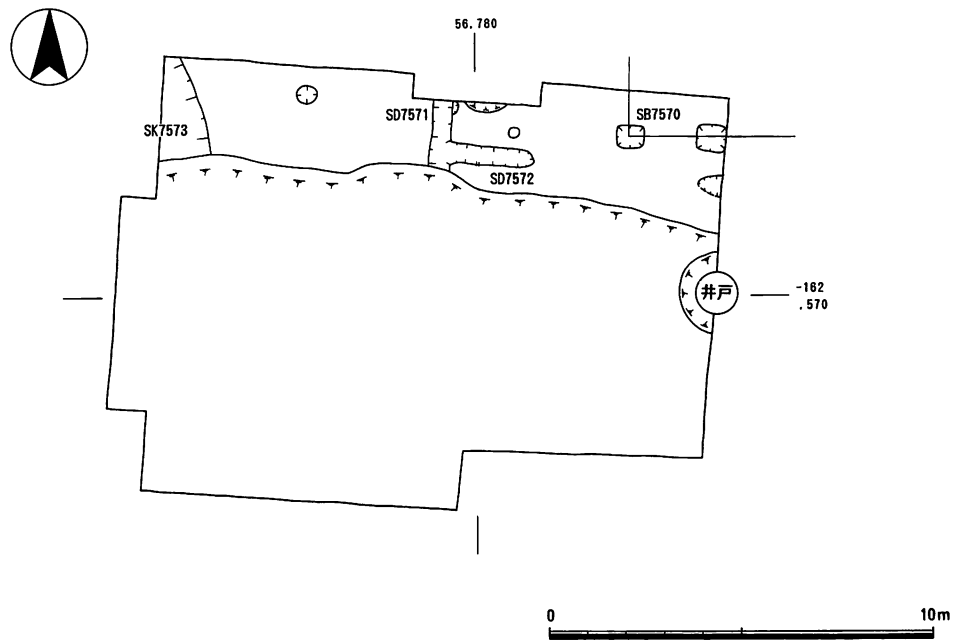
S K 7573 調査地の北西端で検出した落ち込み状の土坑で、遺構面からは最大深で約0.3mである。暗茶褐色の埋土を持つが、遺物は出土せず、時期は不明である。

これら遺構が見つかった地山面の南、調査地の約4分の3の範囲はすでに掘削・攪乱され湿地状になっていたところを昭和に入ってから瓦礫やコンクリート片などで埋め立てた跡であり、現地表面から1m以上掘削しても遺構面は現れなかった。

### ③まとめ

不本意な形で行った調査ではあるが、調査事例のほとんどない近鉄線以南の第四種地で遺構を検出できた事は貴重な事例であるといえよう。また、今後の現状変更への対応方法を考えていく上でも課題を残した事になる。

検出した遺構としてはS B 7570が特に注目される。今回の調査地は平安時代に展開していた史跡東半の方格地割のうち、木葉山東ブロックのほぼ中央部にあたると推定される。S B 7570は、棟方向は判別できないものの、この区画の中心的な施設の一部分である可能性は高い。周辺では第48-7次調査で比較的まとまって遺構を検出しており、また西隣の木葉山西ブロックでは八脚門S B 6850とそれに取りつく柵列が検出されている。面的な計画調査が不可能な史跡南部の住宅密集地においては、小面積ながらも、こうしたデータの蓄積が重要である事を証明したといえるだろう。 (大川勝宏)



第17図 斎宮304-3番地 立会調査地遺構略実測図 (1:200)

## 付篇 2 史跡現状変更等許可申請

平成7年度中の斎宮跡にかかわる史跡現状変更等許可申請は、39件提出された。このうち3件は史跡の実態解明のための計画的発掘調査にかかわるものであり、個人等から申請のあった4件について事前に発掘調査をすることを前提としており、7年度は2件について発掘調査を実施した。

そのほかの32件については住宅密集地の宅地敷地内における増築や改築など比較的小規模であったり、工事が簡易で地下遺構に影響を及ぼさないもので、基礎掘削工事にあたっては斎宮歴史博物館並びに明和町教育委員会職員の立ち会いを実施している。

7年度の申請の内容は、一覧表のとおりであり、これらの申請を（A）個人等から申請されるもの、（B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴うもの、（C）史跡環境整備および維持管理等に伴うもの、（D）史跡の実態解明のための計画的発掘調査を実施するに当たっての申請に分けることができる。

### （A）個人等による申請

個人等による申請は16件あった。そのうち保存管理計画における土地利用区分のうえで第三種保存地区内の水田へ盛土をする変更（第110-2次調査）と斎宮土地改良区事務所の建替え（第110-1次調査）の2件について事前の発掘調査を実施した。また、第一種保存地区内での申請が1件あったが、これは農地へ4cmのパイプを打ち込み灌漑用の井戸を設置するもので地下遺構の影響はほとんどないものであった。ほかの11件は第四種保存地区内に個人住宅や農業用倉庫などの増築および改築等の申請で工事立ち会いを条件に許可を得ており、基礎の掘削の深さが地下遺構まで達せず史跡に影響を及ぼすことなく施工している。

なお、申請は提出したものの施工保留のため調査を実施していないものが2件ある。

### （B）公共機関等による地域の生活環境整備に伴う申請

この申請は15件の提出があり、その内容は、道路の舗装や側溝等の改修が12件、電柱の建替え、水道管の布設、交通安全対策としての信号機の設置である。この内、側溝新設の3件については発掘調査が前提となっていたが掘削範囲内では後世の攪乱により遺構面が残っていないことが判明したため工事立ち会いで着工した。

### （C）史跡環境整備および維持管理等に伴う申請

史跡の維持管理および活用にかかわる事業等について6件の申請が提出された。その内容は、史跡整備地内の樹木の植栽が3件あったほか史跡を訪れる人や地域住民の憩いの場として斎宮駅北側に花壇等の暫定的な整備、史跡の景観保全上障害となる廃材の撤去、斎宮歴史博物館の西側にある体験広場に野焼きを体験できる施設の設置である。

### （D）計画的発掘調査のための申請

これは、三重県教育委員会が主体となり、斎宮歴史博物館が担当して実施しているもので3件の申請が提出され、2,830㎡が調査された。これらの内容については斎宮歴史博物館から別途調査概報が刊行されている。

（中野敦夫）

## 平成7年度現状変更等許可申請一覧表

	申請地	種別	申請者	変更内容	申請受付日	許可日	変更面積	区分	備考
1	竹川字中垣内地内	B	三重県 (松阪土木事務所)	県道路面補修	7.5.15	7.6.6	L=93m	4	
2	竹川字東裏地内	B	三重県 (松阪土木事務所)	県道側溝の補修	7.5.22	7.6.6	L=27m	4	
3	斎宮字笛川2345-3	A	竹内喜三雄	盛土	7.5.24	8.3.21	502m <sup>2</sup>	3	第110-2次調査
4	斎宮字内山地内	C	(財)国史跡斎宮跡 保存協会	花壇等の整備	7.5.1	7.6.19	1889m <sup>2</sup>	1	
5	斎宮字篠林3179	C	明和町教育委員会	公有地廃材撤去	7.6.1	7.6.28	225m <sup>2</sup>	1	
6	斎宮字上園3073-4他	D	三重県教育委員会	計画発掘調査	7.6.28	7.8.4	2400m <sup>2</sup>	1	第111次調査
7	斎宮字牛葉102	A	西村光	個人住宅の撤去 及びブロック積み	7.6.15	7.7.7	72.6m <sup>2</sup> 8m	4	
8	斎宮字古里地内	B	明和町(建設課)	町道の簡易舗装	7.6.22	7.8.4	L=240m	3	
9	竹川字東裏277	A	斎宮土地改良区	事務所の建替え	7.7.5	7.12.26	69.5m <sup>2</sup>	4	第110-1次調査
10	斎宮字牛葉101他	A	登 雍 介	個人住宅の改築	7.7.10	7.8.4	86.76m <sup>2</sup>	4	
11	斎宮字笛川地内	B	明和町(建設課)	町道側溝新設	7.7.13		L=65m	4	
12	斎宮字東加座地内	B	明和町(建設課)	町道側溝新設	7.7.13		L=200m	2	
13	竹川字古里528	C	(財)国史跡斎宮跡 保存協会	野焼き施設の設置	7.7.21	7.8.18	3基	3	
14	斎宮字鈴池568	A	森下善弘	農業用倉庫の建替え	7.7.24	7.8.18	118.13m	4	
15	竹川字中垣内地内	B	三重県 (松阪土木事務所)	県道路面の補修	7.8.2	7.8.18	L=50m	4	
16	竹川字古里559	B	松阪警察署	交通信号機の設置及び 既設標識の撤去	7.8.8	7.8.13	4本	3	
17	斎宮字西加座地内	B	明和町(建設課)	町道側溝の新設	7.8.23		L=80m	2	
18	斎宮字楽殿地内	B	明和町教育委員会 (斎宮跡対策課)	町道のインター ロッキング舗装	7.9.14	7.11.2	L=273m	1	
19	竹川字中垣内地内	B	三重県 (松阪土木事務所)	県道側溝の改修	7.8.31	7.10.18	L=150m	4	
20	斎宮字下園2926-8	A	奥田悦夫	個人住宅 (はなれ)の建築	7.9.11	7.9.25	37.12m <sup>2</sup>	4	
21	竹川字東裏349-2ほか	A	石田宏和	個人住宅の改築	7.9.26	7.10.23	70.38m <sup>2</sup>	4	
22	竹川字古里576	A	池田幸弘	個人住宅の改築	7.9.26	協議中	259.83m <sup>2</sup>	4	

	申請地	種別	申請者	変更内容	申請受付日	許可日	変更面積	区分	備考
23	竹川字花園663-1他	A	中川拓也	ガソリンスタンド造成	7.9.28	協議中	1,341m <sup>2</sup>	3	
24	斎宮字鈴池304-3	A	宇田一巳	個人住宅の建替え	7.10.31	7.12.1	110.84m <sup>2</sup>	4	
25	斎宮地内	B	斎宮土地改良区	排水路の補修	7.10.30	7.11.15	L=15m	3	
26	竹川字中垣内375-1	A	南庄八	個人住宅 ブロック塀設置	7.11.6	7.11.27	L=11.5m	4	
27	斎宮字牛葉376	A	大西修	納屋の建替え	7.11.14	7.12.1	46.38m <sup>2</sup>	4	
28	斎宮字東前沖2487-8	A	原野正之	個人住宅の増築	7.11.16	7.12.26	164.62m <sup>2</sup>	4	
29	斎宮字塚山3276-15他	D	三重県教育委員会	計画発掘調査	7.12.11	7.12.26	54m <sup>2</sup>	3	第112次調査
30	竹川字東裏地内	B	三重県 (松阪土木事務所)	県道路面補修	7.12.12	7.12.26	L=12.0m	4	
31	斎宮字古里地内	C	斎宮歴史博物館	植栽	8.1.16	8.1.22	253本	1	
32	斎宮地内	B	明和町(建設課)	流末水路工事	7.12.21	8.1.25	L=28m	3	
33	竹川字古里559-40他	C	明和町(農林水産課)	植栽	8.1.10	8.2.5	302本	1	
34	斎宮字牛葉地内	B	明和町(水道課)	水道管布設	8.1.25	8.3.21	L=388.1m	4	
35	斎宮字内山3060-2	A	中川昭	農業用井戸の設置	8.1.30	8.2.27	1本	1	
36	斎宮字下園地内	C	(財)国史跡斎宮跡 保存協会	植栽	8.2.19	8.3.15	70本	1	
37	斎宮字楽殿地内	B	中部電力(株)	電柱建替え	8.2.19	8.3.15	2本	1	
38	斎宮字広頭3359他	D	三重県教育委員会	計画発掘調査	8.4.15	8.5.7	980m <sup>2</sup>	1	
39	斎宮字牛葉574-4	A	森本宏	個人住宅の建替え	8.3.29	8.5.10	96.88m <sup>2</sup>	4	

第3表 掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法 (m)		時期	備考
					桁行	梁行		

第110-2次調査 (6AGR-O)

SB7550	(1)×-	E 3° N	(1.9)	-	1.9	-	平安前Ⅱ期	
SA7544	(5)	E 1° N	(9.0)		1.8		鎌倉	
SB7540	(4)×2	E 2° N	(7.6)	5.0	1.9	2.5	鎌倉	SA7544より古
SB7541	(3)×2	E 1° S	(6.9)	6.9	2.3	2.3	室町	
SB7542	(3)×2	E 1° S	(4.4)	4.0	2.2	2.0	室町	SB7543より古
SB7543	3×2	E 2° S	6.0	3.8	2.0	1.9	室町	

斎宮304-3番地立会調査 (6ADT-P)

SB7570	(1)×-	E 0° W (?)	(2.2)	-	2.2	-	平安	
--------	-------	---------------	-------	---	-----	---	----	--

第4表 出土遺物観察表

110-1 次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号	
1	SX7496	須恵器杯	(口径) 9.6cm (器高) 3.0cm	体部ロクロナデ、底部外面へラ切り後ナデ	2mm以下の白色石粒含むが密	良好	内：灰白 外：灰	N 6/0 N 7/0	全体の約90%	底部外面に窯内降下物による自然釉薬	R1
2	SX7496	須恵器杯	(口径) 10.0cm (残高) 2.0cm	体部ロクロナデ	密	良好	内：灰白 外：灰	N 5/1 N 6/1	全体の約20%弱	外面に自然釉がゴマメ状に付着	R5
3	SX7496	須恵器杯	(口径) 9.2cm (器高) 3.0cm	体部ロクロナデ、底部外面回転へラ切りのみ	密	良好	内：黄灰 外：灰	2.5Y 6/1 N 5/1	全体の約20%	焼きぶくれがみられる	R3
4	SX7496	須恵器杯	(口径) 9.8cm (器高) 3.7cm	体部ロクロナデ、底部外面へラ切り後板状工具によるカキ目、底部内面ナデ	密、溶融した黒色粒を多量に含む	良好	内：灰白 外：灰	N 6/1 N 6/1	全体の約85%	内外面に多数の焼きぶくれがみられる	R4
5	SX7496	土師器甕	(口径) 15.0cm (残高) 9.0cm	口縁部外面ヨコナデ、外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良好	内：橙 外：にぶい橙	5YR 7/6 5YR 7/4	全体の約20%	外面に煤付着	R6
6	SX7497	須恵器杯	(口径) 9.5cm (器高) 3.8cm	体部ロクロナデ、底部外面へラ切り後板状工具によるカキ目、底部内面ナデ	密、溶融した黒色粒をわずかに含む	良好	内：灰白 外：灰	5Y 6/1 5Y 5/1	全体の約85%		R2

110-2 次調査

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号	
1	SD7525	土師器杯	(口径) 12.7cm (器高) 3.0cm	体部ナデ・オサエ、口縁部ヨコナデ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟	内：灰白 外：灰	2.5Y 8/2 10YR 8/3	全体の約80%	器表面の磨耗著しい	R61
2	SD7520	土師器杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.2cm	体部ナデ・オサエ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：灰褐	5YR 6/6 5YR 6/6	全体の約70%		R10
3	SD7520	土師器皿	(口径) 17.0cm (器高) 2.8cm	体部内面ナデ、外面ケズリ口縁部外面ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：橙	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	全体の約40%		R11
4	SK7506	土師器甕	(口径) 18.3cm (残高) 5.3cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ後ナデ	微細な砂粒を多量に含む	良好	内：にぶい黄橙 外：にぶい黄橙	10YR 7/2 10YR 7/2	口径の約1/2	内面にへラ当たり痕	R19
5	SK7506	土師器甕	(口径) 18.0cm (残高) 5.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良好	内：灰褐 外：灰褐	10YR 7/3 10YR 7/3	口径の約1/4	外面に二次焼成による赤化みられる	R20
6	SK7506	土師器杯	(口径) - (器高) 2.9cm	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：橙	2.5YR 6/6 2.5YR 6/6	口径の1/10以下		R21
7	SK7506	土師器皿	(口径) 17.3cm (器高) 2.4cm	体部ナデ・オサエ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内：明赤褐 外：明赤褐	2.5YR 5/6 2.5YR 5/6	全体の約50%		R22
8	SK7506	須恵器把手付盤	(口径) 36.6cm (器高) 8.7cm	体部ロクロナデ、外面下半のみロクロケズリ、口縁部ヨコナデ	1mm程度の長石粒を含むが密	ややあまい	内：灰白 外：灰白	2.5Y 7/1 2.5Y 7/1	口径の約1/3	ロクロ右回転	R18
9	SD7501 (上層)	土師器杯	(口径) 14.3cm (器高) 2.7cm	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：橙	5YR 6/8 5YR 6/8	口径の約1/8	粘土接合痕残る器表面の磨耗著しい	R3
10	SD7501 (中層)	土師器杯	(口径) - (器高) 3.1cm	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：橙	5YR 6/8 5YR 6/8	口径の約1/10		R4
11	SD7501 (中層)	土師器杯	(口径) - (器高) 2.7cm	体部外面ケズリ、内面ナデ口縁部外面ヨコナデ	密	良好	内：橙 外：橙	5YR 6/6 5YR 6/6	口径の約1/10		R9

No	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
12	S D 7501 (中層)	土師器 皿	(口径) 1.9cm (器高) —	体部外面ケズリ、内面ナデ 口縁部ヨコナデ	密	良好	内: 橙 外: 橙 5YR 6/6 5YR 6/6	口径の約1/10	器表面の磨耗著しい	R 5
13	S D 7501 (中層)	土師器 皿	(口径) — (器高) 2.3cm	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	密	良好	内: 橙 外: 橙 5YR 6/6 5YR 6/6	口径の約1/10		R 6
14	S D 7501 (中層)	土師器 甕	(口径) 2.9cm (残高) —	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ	密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 6/3 10YR 6/3	口径の1/10弱	外面に煤付着	R 7
15	S D 7501 (上層)	須恵器 長頸壺	(底径) 8.4cm (残高) 10.5cm	体部ロクロナデ、底部外面 回転糸切り痕、肩部に沈線	密	軟質	内: 灰白 外: 灰 2.5Y 7/1 5Y 6/1	胴部の約60%	ロクロ右回転か? 外面の磨耗著しい	R 1
16	S D 7501 (中層)	灰釉陶器 碗	(口径) 17.3cm (高台径) 7.8cm (器高) 6.2cm	体部ロクロナデ、底部外面 ロクロケズリ、貼付高台、 灰釉漬け掛け	密	良好	内: 黄灰 外: 黄灰 釉: 灰白 2.5Y 6/1 2.5Y 6/1 2.5Y 7/1	全体の約30%	底部外面に曇痕あり 転用硯か? ロクロ右回転	R 65
17	S D 7501 (中層)	須恵器 鉢	(口径) 25.6cm (残高) 7.0cm	ロクロナデ成形	密	ややあまい	内: 灰白 外: 灰白 2.5Y 7/1 2.5Y 7/1	口径の約1/4	ロクロ右回転	R 8
18	S D 7501 (中層)	須恵器 広口壺	(口径) 23.4cm (器高) 9.5cm	口頸部ロクロナデ、体部外面 平行タタキ目、内面同心 円タタキ目	微細な砂粒含むが 密	良好	内: 灰 外: 灰 N 5/0 N 5/0	口径の約1/2	ロクロ左回転	R 2
19	S D 7531	灰釉陶器 碗	(高台径) 6.8cm (残高) 2.0cm	体部ロクロナデ、貼付高台	密	良好	内: 灰白 外: 灰白 2.5Y 7/1 2.5Y 7/1	高台径の約2/3	ロクロ右回転 灰釉剥離する	R 12
20	S D 7531	土師器 小皿	(口径) 8.5cm (器高) 1.6cm	体部ナデ・オサエ、口縁部 ヨコナデ	密	良好	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙 10YR 8/4 10YR 8/4	口径の約1/4		R 14
21	S D 7531	須恵器 広口壺	(口径) 7.0cm (残高) —	口頸部ロクロナデ	微細な白色粒をわずかに含む	良好	内: 灰白 外: 灰 5Y 7/1 5Y 7/1	口径の1/10弱		R 15
22	S D 7531	須恵器 盤	(口径) 5.8cm (残高) —	口頸部ロクロナデ、口縁端 部ヨコナデ	微細な砂粒を多量に含む	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 6/3 10YR 6/3	口径の1/10以下	ロクロ左回転	R 13
23	S K 7519	土師器 小皿	(口径) 8.9cm (器高) 1.4cm	体部ナデ・オサエ、口縁部 ヨコナデ	密	良好	内: 灰黄 外: 灰黄 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	口径の約1/4	粘土接合痕がわずかに残る	R 34
24	S K 7519	ロクロ土師器 台付杯	(口径) 10.0cm (残高) 1.3cm	ロクロナデ成形	密	良好	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙 10YR 8/3 10YR 8/3	口径の約1/2		R 32
25	S K 7519	ロクロ土師器 台付杯	(高台径) 7.8cm (残高) 3.6cm	体部ロクロナデ、貼付高台	微細な砂粒含むが 密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/3	高台部の約70%		R 29
26	S K 7519	土師器 碗	(口径) 15.4cm (器高) 4.1cm	体部ナデ・オサエ、口縁部 ヨコナデ	5mm程度の小石や 微細な砂粒を多量に含む	良好	内: 灰 外: 灰 5Y 5/1 5Y 5/1	口径の約1/4		R 33
27	S K 7519	陶器 碗(山茶碗)	(口径) 16.3cm (高台径) 8.0cm (器高) 4.8cm	体部ロクロナデ、口縁部 ヨコナデ、貼付高台、底部外 面糸切り痕	微細な砂粒を多量に含むが密	良好	内: 灰白 外: 灰白 自然釉: 灰オリーブ 2.5Y 7/1 2.5Y 7/1 7.5Y 6/2	全体の約50%	ロクロ左回転 高台部初圧痕 内面に自然釉付着	R 28
28	S D 7549	陶器 碗(山茶碗)	(高台径) 7.4cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台 底部外面糸切り後ナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰黄 外: 灰黄 2.5Y 6/2 2.5Y 6/2	底部のみ残存	ロクロ右回転 高台部初圧痕	R 16
29	S D 7549	陶器 碗(山茶碗)	(高台径) 6.9cm (残高) 2.1cm	体部ロクロナデ、貼付高台 底部外面糸切り後ナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰白 外: 灰白 2.5Y 7/1 2.5Y 7/1	底部の約2/3	ロクロ右回転	R 17
30	S D 7549	陶器 碗(山茶碗)	(底径) 4.5cm (残高) 1.3cm	体部ロクロナデ、底部外面 回転糸切り痕	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰白 外: 灰白 5Y 7/1 5Y 7/1	底部のみ残存	ロクロ右回転	R 92
31	S K 7505	土師器 雪平鍋	(口径) 17.6cm (残高) 5.5cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 ナメハケ、内面ナデ、把 手部ナデ	密	良好	内: 灰黄 外: 灰黄 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	全体の約50%	体部外面と注口部内面に スス・炭化物付着	R 23
32	S K 7505	土師器 鍋	(口径) 19.5cm (器高) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 ハケ、内面ハケのちナデ	密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/2 10YR 7/2	口径の1/4弱		R 24
33	S K 7553	陶器 灰釉小皿	(口径) 10.4cm (器高) 2.2cm	体部ロクロナデ、底部外面 回転糸切り痕	微細な砂粒多く気 孔多い	良好	内: 灰白 外: 灰白 釉: オリーブ灰 5Y 7/1 10Y 6/2	口径の約1/4	口縁部に灰釉漬け掛け	R 26
34	S K 7553	陶器 碗(山茶碗)	(高台径) 8.3cm (残高) 2.7cm	体部ロクロナデ、貼付高台 底部外面回転糸切り痕	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰白 外: 灰白 5Y 5/1 2.5Y 7/1	高台径の約1/4	内面に曇痕あり、転用硯か?	R 27
35	S K 7553	陶器 三足盤	(口径) — (残高) 4.3cm	体部ロクロナデ、口縁部ヨ コナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰白 外: 灰白 釉: 灰オリーブ 2.5Y 7/1 7.5Y 6/2	口径の1/10弱	全面に灰釉施軸	R 25
36	S K 7523	陶器 鉢	(口径) 28.6cm (残高) 7.8cm	体部外面ロクロナデ、内面 ナデ、口縁部ヨコナデ	2mm程度の長石粒 わずかに含むが密	良好	内: 暗赤褐 外: 暗赤褐 2.5YR 3/1 2.5YR 3/1	口径の約1/4	内面に粗いハケ	R 58
37	S D 7530	土師器 茶釜	(口径) 14.4cm (残高) 21.5cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 上半ハケ、下半ケズリ、内 面上半ハケ、下半ケズリか	密	良好	内: 黒褐 外: 暗灰黄 2.5Y 3/2 2.5Y 5/2	全体の約50%	外面に多量の煤付着	R 61
38	S E 7510	土師器 鍋	(口径) 25.6cm (残高) 23.5cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 上半ハケ、下半ケズリ、内 面ナデ	密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 7/4	全体の約40%		R 60
39	S K 7514	土師器 鍋	(口径) 46.4cm (残高) 16.4cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 上半ハケ、下半ケズリ、内 面板ナデ、一部ハケ	密	良好	内: にぶい橙 外: 褐灰 7.5YR 6/4 10YR 4/1	口径の約1/3	外面に煤付着	R 59
40	S B 7550	土師器 鍋	(口径) — (残高) 4.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい橙 7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	口径の約1/10	外面に煤付着	R 50
41	S B 7550	土師器 小皿	(口径) 5.5cm (器高) 1.1cm	内外面ナデ・オサエ	緻密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 7/4	全体の約30%		R 49
42	S B 7550	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (高台径) 4.9cm (器高) 3.4cm	全面ナデ 貼付高台	密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい橙 7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	全体の約50%		R 47
43	S B 7550	陶器 灰釉折縁皿	(口径) 12.3cm (残高) 2.0cm	体部ロクロナデ、体部外面 下半ロクロケズリ	密	良好	内: 灰白 外: 灰オリーブ 7.5Y 7/1 7.5Y 6/2	口径の約1/4	全面に灰釉施軸	R 48
44	S K 7528	土師器 皿	(口径) 9.8cm (器高) 1.8cm	体部ナデ、口縁部ヨコナデ	緻密	良好	内: 橙 外: 橙 7.5YR 6/6 7.5YR 6/6	全体の約90%		R 56
45	S K 7563	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (高台径) 4.6cm (器高) 4.6cm	全面ナデ 貼付高台	密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい橙 7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	全体の約60%	器形のゆがみ大	R 47
46	S K 7555	土師器 鍋	(口径) 30.0cm (残高) 4.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面 タテハケ、内面ナデ	密	良好	内: にぶい黄橙 外: 黒 10YR 7/3 2.5Y 2/1	口径の約1/4		R 57

No.	出土遺構	器種	法量	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
47	S K 7565	土師器 小皿	(口径) 7.3cm (器高) 1.5cm	内外面ナデ・オサエ	緻密	良好	内: 浅黄 外: 浅黄 2.5Y 7/3 2.5Y 7/3	全体の約60%		R 54
48	S K 7565	土師器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.4cm	内外面ナデ・オサエ	緻密	良好	内: 浅黄 外: 浅黄 2.5Y 7/3 2.5Y 7/3	全体の約50%		R 55
49	S K 7565	土師器 皿	(口径) 11.4cm (器高) 2.2cm	内外面ナデ・オサエ	緻密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/3	全体の約50%		R 53
50	S K 7565	土師器 鍋	(口径) 39.2cm (残高) 12.3cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、下半ケズリ、内面上半ナデ、下半ケズリ	密	良好	内: にぶい赤褐 外: にぶい赤褐 5YR 5/4 5YR 5/4	口径の約1/4		R 52
51	S K 7565	陶器 瓶	(底径) 11.5cm (残高) 12.1cm	体部ロクロナデ、外面下部ロクロケズリ、底部付近を残し鉄釉漬け掛け	密	良好	内外: にぶい橙 釉: 黒 7.5YR 6/4 2.5Y 2/1	全体の約30%		R 51
52	H-17 包含層	陶器 天目茶碗	(口径) 13.2cm (残高) 5.7cm	体部ロクロナデ、外面下部ロクロケズリ、鉄釉漬け掛け	白色砂粒等の微細な砂粒多量に含む	良好	内外: 浅黄橙 釉: 暗褐 10YR 8/4 7.5YR 3/4	口径の1/4 弱		R 69
53	S E 7560	土師器 皿	(口径) 8.2cm (器高) 2.3cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: 褐灰 10YR 7/3 10YR 5/1	完存	内底面に工具痕 内面に黒色物付着	R 74
54	S E 7560	土師器 皿	(口径) 8.2cm (器高) 2.2cm	外面ナデ・オサエ、内面工具ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/2	完存	内面に工具痕残る	R 72
55	S E 7560	土師器 皿	(口径) 8.4cm (器高) 2.3cm	外面ナデ・オサエ、内面工具ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい黄橙 7.5YR 7/4 10YR 6/3	口縁部の一部欠損	内面に工具痕残る 赤色粒含む	R 76
56	S E 7560	土師器 皿	(口径) 8.3cm (器高) 2.2cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい橙 外: 淡黄 7.5YR 7/3 2.5Y 8/3	完存		R 73
57	S E 7560	土師器 皿	(高台径) 8.9cm (器高) 2.3cm	外面ナデ・オサエ、内面工具ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい橙 7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	全体の約80%	内面に工具痕残る	R 75
58	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 6.9cm (器高) 1.1cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	3mm以下の小石含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: 浅黄橙 10YR 7/4 10YR 8/4	完存		R 77
59	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.5cm (器高) 0.7cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 7/4	完存		R 78
60	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.3cm (器高) 0.7cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: 浅黄橙 10YR 7/4 10YR 8/4	完存	胎土に植物痕あり	R 83
61	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.2cm (器高) 1.0cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 6/3	完存		R 80
62	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.1cm (器高) 0.8cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: 浅黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 8/4 10YR 7/4	ほぼ完存		R 81
63	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.4cm (器高) 1.1cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/3	完存		R 79
64	S E 7560	土師器 小皿	(口径) 7.1cm (器高) 1.1cm	内面ナデ、外面ナデ・オサエ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/3	完存		R 82
65	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 22.4cm (残高) 5.3cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	3mm以下の赤色粒含むが密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい黄褐 7.5YR 7/4 10YR 5/3	口径の約1/2	外面に煤付着	R 87
66	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 30.4cm (残高) 12.1cm	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ケズリ、内面上半ナデ、下半ケズリ	2mm以下の小石含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: 黒褐 10YR 7/3 10YR 3/1	口径の約1/3	外面に煤、内面下半に炭化物付着	R 90
67	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 23.0cm (残高) 10.9cm	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ケズリ、内面上半ナデ、下半ケズリ	2mm以下の小石含むが密	良好	内: にぶい黄橙 外: 黒褐 10YR 7/3 10YR 3/1	口径の約4/5	外面上半に煤、内面底部に炭化物付着	R 91
68	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 20.4cm (残高) 6.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ケズリ、内面板ナデ、ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内: にぶい橙 外: にぶい黄橙 7.5YR 7/4 10YR 7/4	口径の約1/3		R 85
69	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 26.6cm (残高) 9.9cm	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ケズリ、内面ケズリ・ナデ	2mm以下の小石・赤色粒含むが密	良好	内: にぶい黄褐 外: 黒褐 10YR 5/4 10YR 3/1	口径の約1/5	体部外面に煤付着	R 86
70	S E 7560	土師器 鍋	(口径) 37.4cm (残高) 12.1cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒含むが密	良好	内: 浅黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 8/4 10YR 7/4	口径の1/4	体部外面に煤付着	R 84
71	S E 7560	土師器 茶釜	(口径) 13.9cm (残高) 5.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ	微細な砂粒多量に含むが密	良好	内: 灰黄褐 外: 黒 10YR 5/2 10YR 2/1	口径の約1/4	外面から口縁内部まで煤付着	R 89
72	S E 7560	土師器 羽釜	(口径) 25.0cm (銜径) 30.0cm (残高) 7.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデ・オサエ	2mm以下の砂粒含むが密	良好	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙 10YR 8/3 10YR 8/3	口径の約1/4		R 88
73	S E 7560	土師器 羽釜	(口径) 33.4cm (銜径) 45.4cm (残高) 27.7cm	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、下半ケズリ、内面板状工具によるナデ	微細な砂粒多量に含む	良好	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 7/3	全体の約45%	外面に煤、内面に炭化物付着	R 71
74	S E 7519	土師器 ミニチャコ土埴	(口径) 7.3cm (残高) 2.6cm	内外面ナデ・オサエ	5mm程度の小石含む	ややあま	内: 灰白 外: 灰白 2.5Y 8/2 2.5Y 8/2	口径の約1/4		R 36
75	S K 7515	製塩土器	(口径) — (残高) 5.3cm	外面ナデ・オサエ、内面下部にヨコハケ残る	密	良好	内: 橙 外: にぶい赤褐 2.5YR 6/6 2.5YR 5/4	口径の約1/10	内外面二次焼成による赤変	R 63
76	E-16 包含層	青磁 碗	(高台径) 6.0cm (残高) 2.7cm	体部ロクロナデ、削り出し高台、高台内面除き施釉、見込みに圏線と印花文	微細な黒色粒含むが密	良好	胎地: 灰 釉: オリーブ灰 5Y 6/1 10Y 6/2	高台部のみ残存	龍泉窯系	R 62
77	S K 7566	青磁 碗	(高台径) 6.4cm (残高) 2.3cm	体部ロクロナデ、削り出し高台	緻密	堅緻	胎地: 灰 釉: 灰オリーブ 5Y 6/1 7.5Y 4/2	高台のみ残存	龍泉窯系	R 66
78	S D 7539	瓦 丸瓦	(残長) 14.5cm (残幅) 9.3cm	外面ヘラナデ、内面布目圧痕	2cm程度の小石や砂粒を多量に含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 5Y 7/1 5Y 7/1	全体の約30%		R 68
79	S K 7512	須恵器 猿面硯	(残長) 9.5cm (残幅) 11.0cm	硯面タタキによる青海波文背面ケズリ、にタタキ目残る、端部ケズリ、貼付脚台	1mm前後の白色粒、黒色粒を多量に含む	良好	表: 灰 裏: 灰 7.5Y 5/1 5Y 5/1	全体の約40%	硯面の一部に墨痕残る、背面の一部に自然釉付着	R 70
80	S D 7530	陶器 碗(山茶碗)	(高台径) 7.8cm (残高) 2.2cm	体部ロクロナデ、貼付高台高台内面糸切り痕	黒色粒や微細な砂粒多量に含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 5Y 6/1 2.5Y 7/1	高台部のみ残存	転用硯	R 67
81	S K 7554	石製品 砥石	(残長) 4.7cm (幅) 3.9cm	砂岩製	—	—	表: 浅黄 裏: 浅黄 2.5Y 7/3 2.5Y 7/3	全体の約30%	砥石面に細かい擦痕	R 64



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい7ねんどげんじょうへんこうきんきゅうはつくつちょうさほうこく								
書名	史跡 斎宮跡 平成7年度現状変更緊急発掘調査報告								
副書名									
巻次									
シリーズ名	三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	13								
編著者名	吉水康夫・駒田利治・野原宏司・上村安生・大川勝宏・赤岩 操・森田幸伸・中野敦夫								
編集機関	斎宮歴史博物館								
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-3800								
発行年月日	明和町教育委員会 1997年3月21日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 。 ’ ”	東 経 。 ’ ”	調査期間 m <sup>2</sup>	調査面積	調査原因	
		市 町 村	遺跡番号						
さいくうあと 斎宮跡 第106-6次 調査	たまぐんめいわちとうさいくう 多気郡明和町斎宮他 さいくうあざつかやま 斎宮字塚山	24442	210	34° 31' 55"	136° 36' 16"	950123 }	128	住宅新築	
				34° 32' 30"	136° 37' 37"				951117
				第110-1次 調査	たけかわあざひがしうら 竹川字東裏				950921 }
第110-2次 調査	さいくうあざあえかわ 斎宮字笛川			951011 }	480	盛土			
951204									
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
斎宮跡 第106-6次 調査	官 衙	飛 鳥 } 鎌 倉	溝・土坑		土師器片・陶器片		古墳周溝か？		
第110-1次 調査			周溝遺構・土坑		土師器・須恵器・近世陶磁器		7世紀の方形周溝遺構		
第110-2次 調査			区画道路・掘立柱建物・土坑・井戸・溝		土師器・須恵器・青磁、猿面硯		方格地割の道路遺構		

# 圖 版

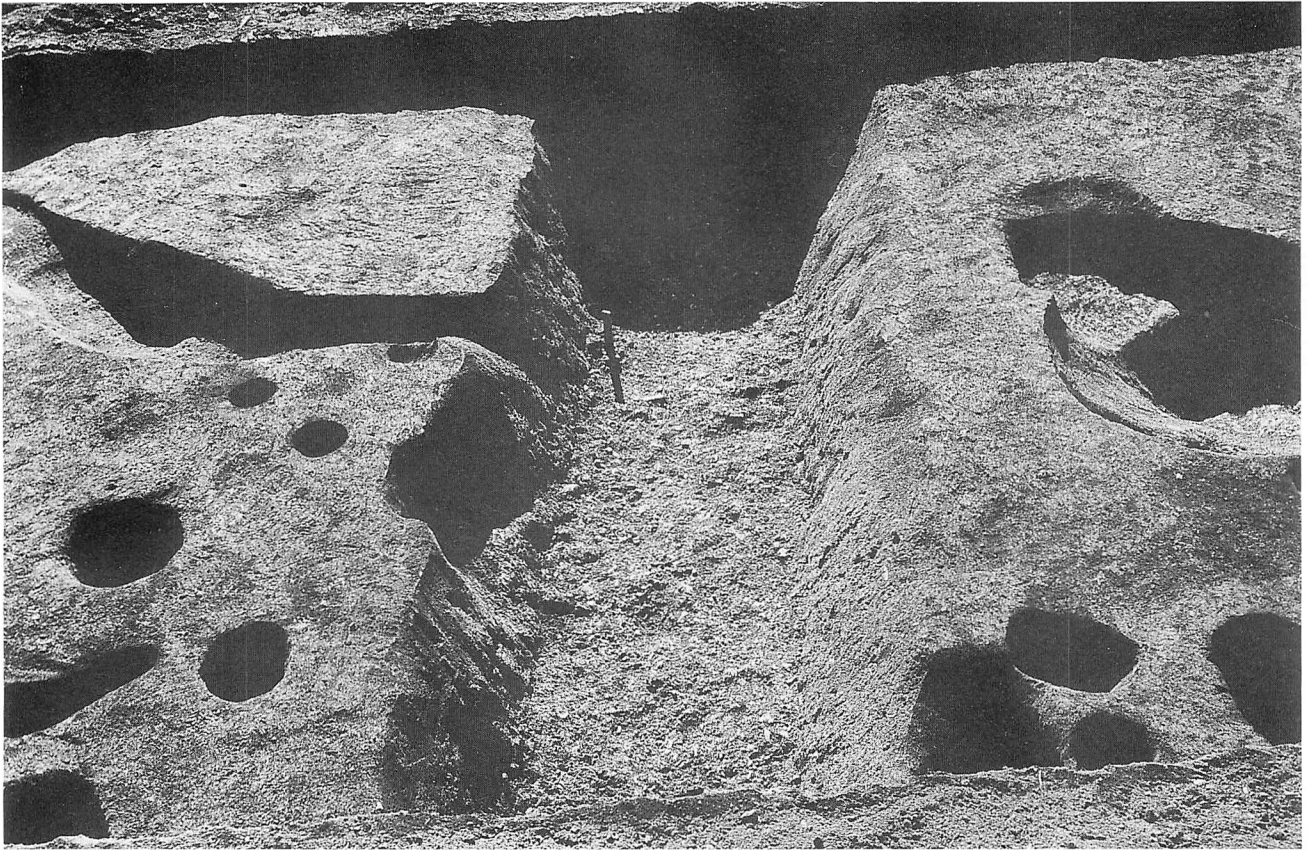




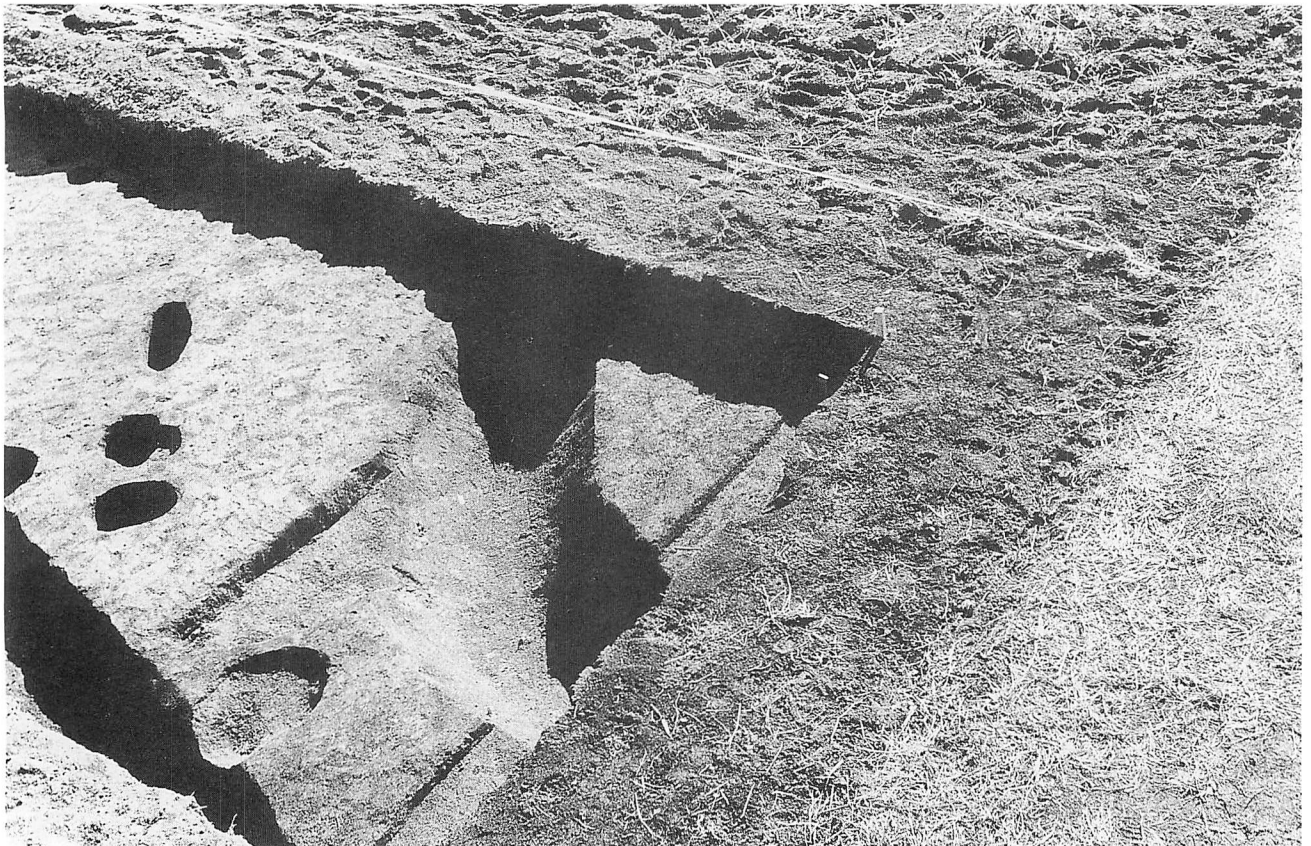
A 地区全景（南西から）



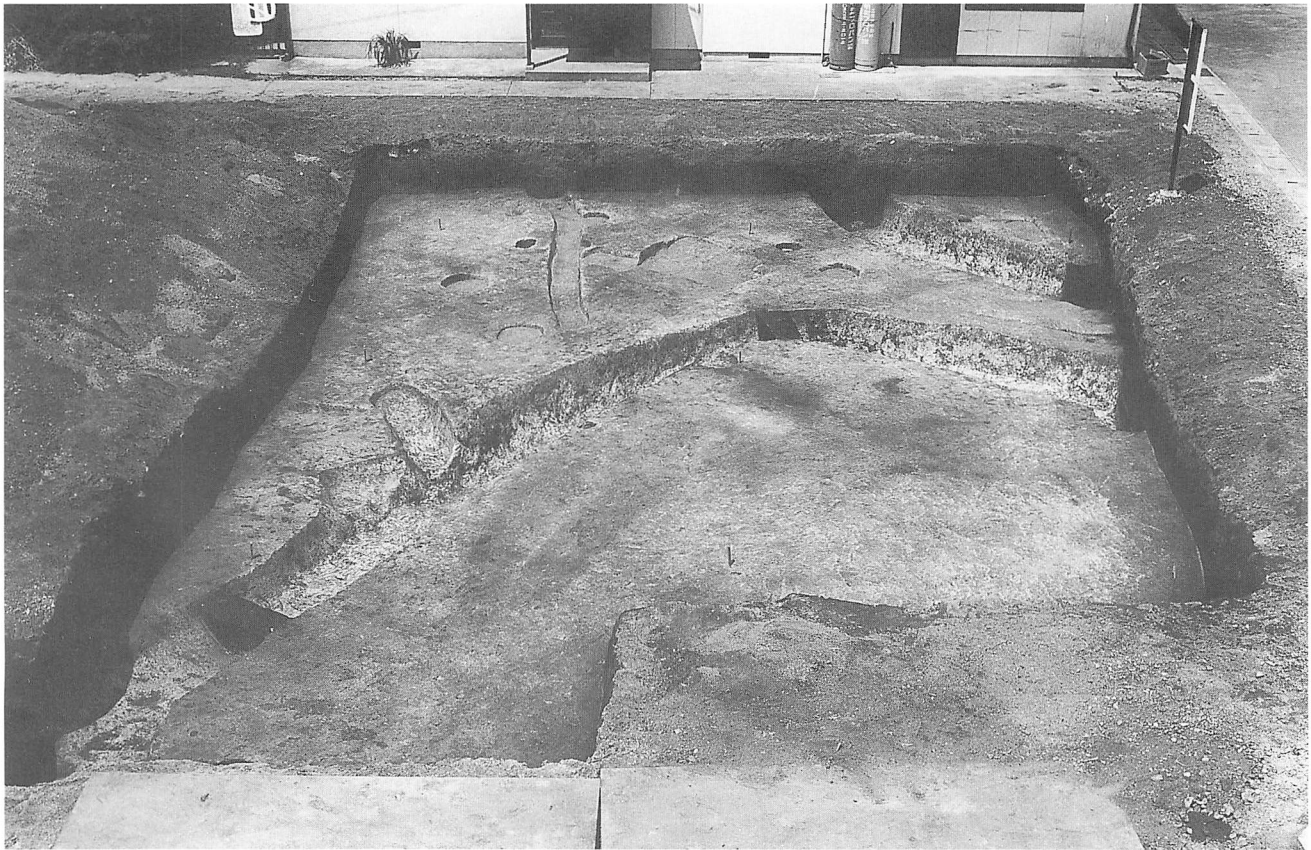
B 地区全景（南西から）



S D 7364 (北西から)



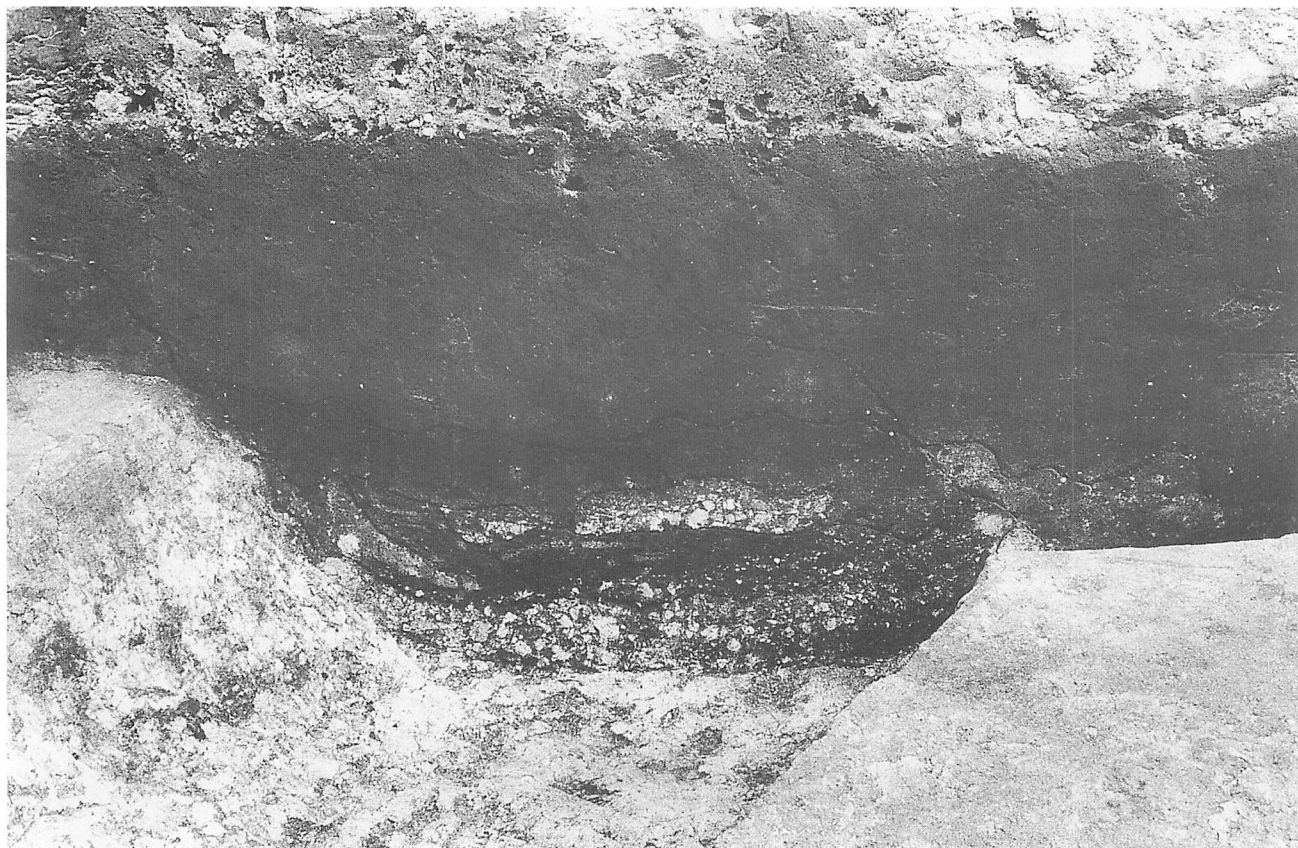
S D 7366 (北西から)



調査区全景（東から）



S X 7496断面（東から）



S X 7497断面（南から）



S X 7497断面（西から）



調査区北半全景（東から）



調査区南半全景（東から）





調査区南建物群（東から）



S B 7550（東から）



S D 7501 (東から)



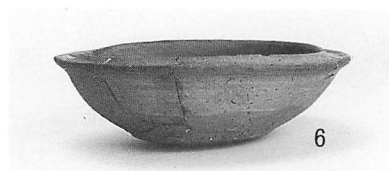
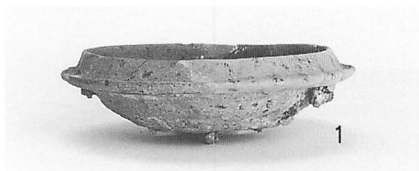
調査区北土坑群 (東から)



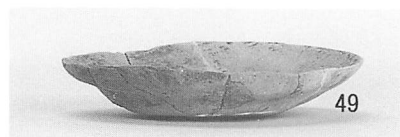
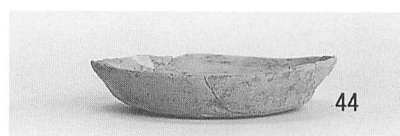
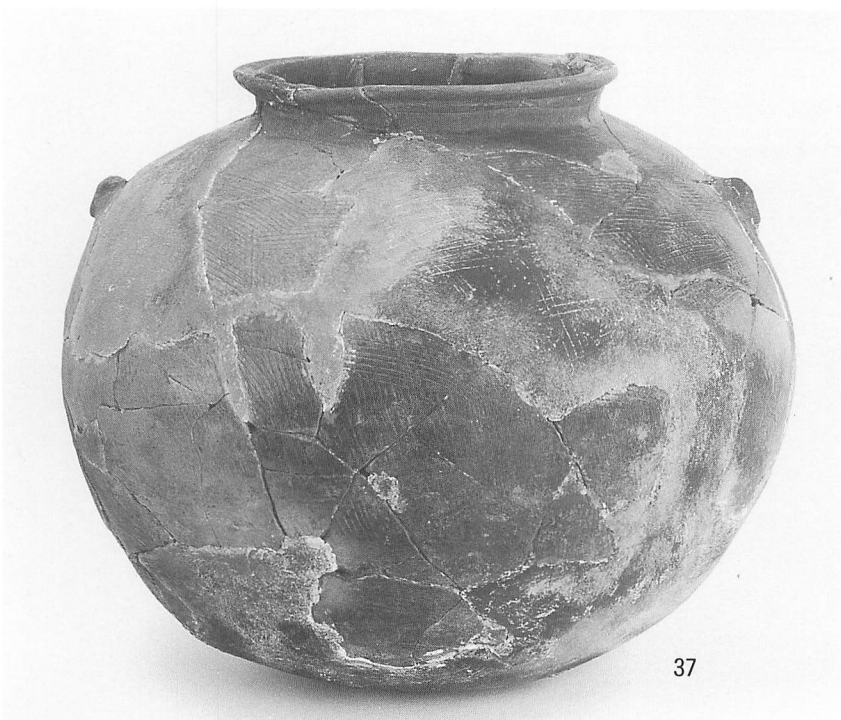
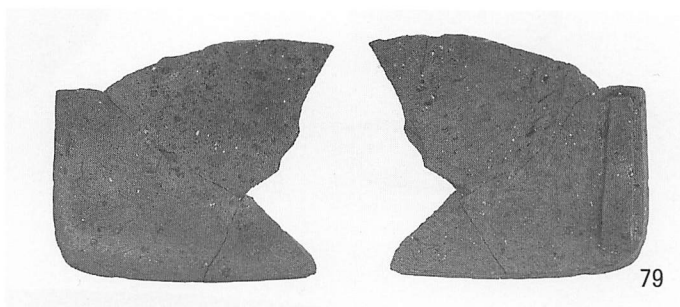
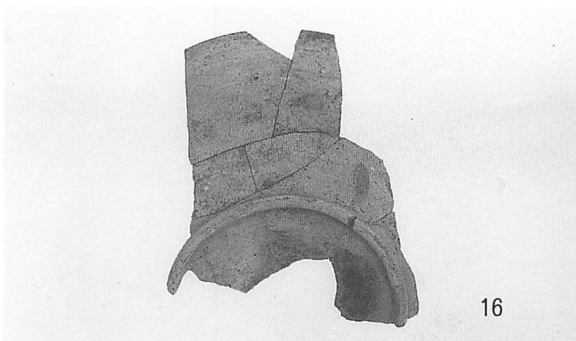
S E 7519 (北から)

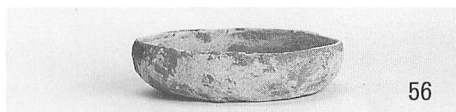


S E 7559・7560 (西から)



第110-2次調査





---

---

史 跡 齋 宮 跡

平成 7 年 度

現 状 変 更 緊 急 発 掘 調 査 報 告

平 成 9 年 3 月 21 日

編 集 齋 宮 歴 史 博 物 館  
明 和 町 教 育 委 員 会

発 行 明 和 町 教 育 委 員 会

印 刷 光 出 版 印 刷 株 式 会 社

---

---

